

茨城県教育財団文化財調査報告第156集

(仮称)荒川本郷土地地区画整理事業
地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ

実穀寺子西遺跡

作業室用

平成 12 年 3 月

都市基盤整備公団茨城地域支社
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第156集

(仮称)荒川本郷土地地区画整理事業
地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ

じっこくてら こにし
実穀寺子西遺跡

平成 12 年 3 月

都市基盤整備公団茨城地域支社
財団法人 茨城県教育財団



実教寺子西遺跡遠景（南から北方向を望む）



第1号軍事施設跡（高角砲台跡）

序

阿見町と都市基盤整備公団は、荒川本郷地区において良好な住環境を有する住宅の供給を行うための土地区画整理事業を進めております。

その事業予定地内には、実穀古墳群、実穀寺子遺跡及び実穀寺子西遺跡が所在しております。そのため、財団法人茨城県教育財団は、住宅・都市整備公団（平成11年10月1日に都市基盤整備公団と名称変更）から開発地内の埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成7年度から平成10年度にかけて発掘調査を実施してまいりました。調査の成果の一部はすでに『茨城県教育財団文化財調査報告第144集』、『茨城県教育財団文化財調査報告第151集』として報告したところであります。

本書は、平成9年4月から平成9年12月、平成10年9月から平成10年12月に調査を行った実穀寺子西遺跡の調査成果を取録したものであります。本書が学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、ひいては教育・文化の向上の一助として、広く活用されることを希望いたします。

なお、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である都市基盤整備公団からいただいた多大な御協力に対し、心から感謝申し上げます。

また、茨城県教育委員会、阿見町教育委員会をはじめ、関係各機関及び関係各位から御指導、御協力を賜りましたことに対し、衷心より感謝の意を表します。

平成12年3月

財団法人 茨城県教育財団
理事長 齋藤佳郎

例 言

- 1 本書は、住宅・都市整備公団（平成11年10月1日、都市基盤整備公団と名称を変更）の委託により、財団法人茨城県教育財団が、平成9年度及び平成10年度に発掘調査を実施した、茨城県稲敷郡阿見町実穀に所在する実穀寺子西遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 当遺跡の発掘調査期間及び整理期間は、以下のとおりである。
 - 第1次調査 平成9年4月1日～平成9年12月31日
 - 第2次調査 平成10年9月1日～平成10年12月31日
 - 第1次整理 平成11年1月1日～平成11年3月31日
 - 第2次整理 平成11年7月1日～平成11年9月30日
- 3 当遺跡の発掘調査は、調査第1課長沼田文夫の指揮のもと、第1次調査を調査第1班長横塚孝徳、主任調査員新井聡、副主任調査員浅野和久が、第2次調査を調査第3班長田所則夫、主任調査員宮崎修士、柴田博行が担当した。
- 4 当遺跡の整理及び本書の執筆・編集は、整理課長川井正一、首席調査員兼野谷悟の指揮のもと、第1次整理を主任調査員宮崎修士、柴田博行が、第2次整理を主任調査員宮崎修士が担当した。執筆は、第3章3節1堅穴住居跡を宮崎と柴田が担当し、それ以外の執筆と編集を宮崎が担当した。
- 5 本書の作成にあたり、軍事施設跡については以下の方々から御教示をいただいた。
 - 土浦市在住 浅野力松氏、名古屋市見晴台考古資料館学芸員 伊藤厚史氏、土浦市在住郷土史家 内山純子氏、阿見町在住郷土史家 大竹房雄氏、群馬県埋蔵文化財調査事業団主幹 菊池実氏、土浦市在住 窪田恵一氏、防衛庁防衛研究所事務官 柴田武彦氏、鳥根県斐川町教育委員会文化課文化財係主任 宍道年弘氏
- 6 発掘調査及び整理に際して、御指導、御協力を賜った関係各機関並びに関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

凡 例

- 1 遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第Ⅹ系座標を用いて区画し、 $X=960m$ 、 $Y=31,720m$ の交点を基準点(A1a1)とした。

大調査区は、この基準点を基に遺跡範囲内を40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西、南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C…、西から東へ1、2、3…、とし、その組み合わせで「A1区」、「B2区」のように呼称した。

さらに、小調査区も同様に北から南へa、b、c…j、西から東へ1、2、3…0と小文字を付し、名称は大調査区の名称を冠し、「A1a1区」、「B2b2区」のように呼称した。







- 2 遺構、遺物、土層に使用した記号は、次のとおりである。

遺構 住居跡-SI 土坑-SK 井戸-SE 溝-SD 軍事施設跡-G 柱穴-P

遺物 土器-P 土製品-DP 石器・石製品-Q 金属製品-M 拓本記録土器-TP その他-Y

土層 擾乱-K

- 3 遺構及び遺物の実測図中の表示は次のとおりである。

 炉  焼土  コンクリート  砂・砂利  織葎  赤砂

● 土器 ○ 土製品 □ 石器・石製品 △ 金属製品 — — — 硬化面

- 4 土層観察と遺物における色調の判定は、「新版標準土色帳」(小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社)を使用した。

- 5 図版及び表の作成方法及び掲載方法については、以下のとおりである。

(1) 遺構全体図は縮尺200分の1とし、各遺構の実測図は、縄文時代と古墳時代が60分の1、近代が150分の1の縮尺で掲載することを基本とした。

(2) 遺物は、原則として3分の1の縮尺で掲載した。

(3) 住居跡の「主軸方向」は、炉と出入り口部を通る軸線を主軸とし、その主軸が座標北からみて、どの方向に、何度ふれているかを、例えば「N-10°-E」のように表示した。手掛かりがない場合は南北に近い軸線を主軸と見なした。

なお、〔 〕を付したものは推定である。

(4) 土器の計測値は、A-口径、B-器高、C-底径、D-高台径、E-高台高とし、単位はcmである。なお、現存値は()、推定値は〔 〕を付して示した。

(5) 遺物観察表の備考の欄は、土器の残存率、実測番号(P、DP、Q、M、Y)、出土位置及びその他必要と思われる事項を記した。

(6) 写真図版中の遺物に付した番号は挿図と遺物の番号である。

- 6 土器の編年は、櫻村宣行氏の「和泉式土器編年考—茨城県を中心として—」(「研究ノート」5号 茨城県教育財団 1996年)に基づいて行った。近代の戦争遺跡の分類は、伊藤厚史氏の「愛知における戦争遺跡の調査」(「日本考古学協会1998年度沖縄大会発表資料」)に基づいて行った。

抄 録

ふりがな	(かしょう) あらかわほんごうちくかくせいりじぎょうちないまいどうぶんかさいちやうさほうこくしよ							
書名	(仮称) 荒川本郷土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書							
副書名	実殺寺子西遺跡							
巻次	Ⅱ							
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告							
シリーズ番号	第156集							
著者名	宮崎修士 柴田博行							
編集機関	財団法人 茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587							
発行機関	財団法人 茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587							
発行日	2000(平成12)年3月21日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村番号	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
いしやくてらごころし 実殺寺子西遺跡	いしやくてらごころし 茨城県稲敷郡 阿見町実殺字 寺子1552番地 の1ほか	08443	36度 00分 27秒	140度 11分 11秒	23- 24m	平成9年度 19970401- 19971231 平成10年度 19980901- 19981231	23.644㎡	(仮称) 荒 川本郷土地 地区画整理事 業に伴う事 前調査
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項	
その他	旧石器時代			石器(尖頭器), 剥片			古墳時代中期の	
その他	縄文時代			縄文土器片(深鉢形土器), 石器(石鏃)			集落跡及び近代	
集落跡	古墳時代	堅穴住居跡 6軒		土師器(坏・碗・高坏・壺・甕・甗), 土製品(球状土錘), 石製模造品 (剣形品), 石製品(白玉・砥石), ガラス玉			の軍事施設跡で ある。	
その他	近世			古銭(寛永通宝)				
軍事施設跡	近代	高角砲台跡 2基		防空兵器に伴う金属部品				
		防空指揮所跡 1基		鉄器(鍬)				
		電探施設跡 1基						
		不明施設跡 1基						
		溝跡 4条						
その他	時期不明	井戸跡 1基		石製品(砥石)				
		土坑 34基						

目 次

序	
例言	
凡例	
抄録	
目次	
図版目次	
表目次	
写真目次	
付図目次	
第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	2
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の成果	9
第1節 遺跡の概要	9
第2節 基本層序の検討	9
第3節 遺構と遺物	10
1 竪穴住居跡	10
2 井戸跡	36
3 土坑	37
4 軍事施設跡	40
5 遺構外出土遺物	53
第4節 まとめ	57
写真図版	
奥付	

図 版 目 次

第1図 実殺寺子西遺跡周辺遺跡分布図	6	第21図 第6号住居跡実測図②	32
第2図 実殺寺子西遺跡(南砲台跡)周辺 戦争関連施設跡分布図	7	第22図 第6号住居跡出土遺物実測図(1)	33
第3図 実殺寺子西遺跡調査区前図	8	第23図 第6号住居跡出土遺物実測図②	34
第4図 基本土層図	9	第24図 第6号住居跡出土遺物実測図(3)	35
第5図 第1号住居跡実測図	11	第25図 第1号井戸跡実測図	37
第6図 第1号住居跡出土遺物実測図(1)	12	第26図 第33号土坑・第33号土坑出土遺物 実測図	38
第7図 第1号住居跡出土遺物実測図(2)	13	第27図 第35号土坑実測図	38
第8図 第2号住居跡実測図(1)	16	第28図 第1号軍事施設跡実測図(1)	41
第9図 第2号住居跡実測図(2)	17	第29図 第1号軍事施設跡実測図(2)	42
第10図 第2号住居跡出土遺物実測図(1)	18	第30図 第2号軍事施設跡実測図(1)	43
第11図 第2号住居跡出土遺物実測図(2)	19	第31図 第2号軍事施設跡実測図(2)	44
第12図 第3号住居跡実測図(1)	20	第32図 第2号軍事施設跡出土遺物実測図	45
第13図 第3号住居跡実測図(2)	21	第33図 第3号軍事施設跡実測図	47
第14図 第3号住居跡出土遺物実測図	22	第34図 第4号軍事施設跡実測図	48
第15図 第4号住居跡実測図	24	第35図 第5号軍事施設跡実測図(1)	50
第16図 第4号住居跡出土遺物実測図	25	第36図 第5号軍事施設跡実測図(2)	51
第17図 第5号住居跡実測図	27	第37図 第5号軍事施設跡出土遺物実測図	52
第18図 第5号住居跡出土遺物実測図(1)	28	第38図 遺構外出土遺物実測図(1)	54
第19図 第5号住居跡出土遺物実測図(2)	29	第39図 遺構外出土遺物実測図(2)	55
第20図 第6号住居跡実測図(1)	31	第40図 遺構外出土遺物実測図(3)	56

表 目 次

表1 実殺寺子西遺跡周辺遺跡一覧表	5	表3 実殺寺子西遺跡住居跡一覧表	36
表2 実殺寺子西遺跡(南砲台跡)周辺 戦争関連施設跡一覧表	5	表4 実殺寺子西遺跡土坑一覧表	39

写真目次

- | | | | |
|------|---|-------|---|
| 巻頭 | 実殺寺子西遺跡遠景（南から北方向を望む）
第1号軍事施設跡（高角砲台跡） | PL 6 | 第5号軍事施設跡確認状況、第5号軍事施設跡、第5号軍事施設跡内部施設跡、第4号溝、第6号溝、第1号井戸跡、第35号土坑遺物出土状況 |
| PL 1 | 国土地理院所蔵の昭和22年米軍撮影空中写真（阿見町、土浦市の海軍基地群） | PL 7 | 第1号住居跡出土遺物 |
| PL 2 | 国土地理院所蔵の昭和22年米軍撮影空中写真（阿見町実殺地区） | PL 8 | 第2号住居跡出土遺物 |
| PL 3 | 第1号住居跡、第1号住居跡遺物出土状況、第2号住居跡、第2号住居跡遺物出土状況、第3号住居跡、第3号住居跡遺物出土状況、第4号住居跡、第4号住居跡遺物出土状況 | PL 9 | 第3・4号住居跡出土遺物 |
| PL 4 | 第5号住居跡、第5号住居跡遺物出土状況、第6号住居跡、第6号住居跡遺物出土状況、第1号軍事施設跡、第1号軍事施設跡内部施設跡 | PL 10 | 第5号住居跡出土遺物 |
| PL 5 | 第2号軍事施設跡、第2号軍事施設跡内部施設跡、第3号軍事施設跡、第3号軍事施設跡内部施設跡、第4号軍事施設跡 | PL 11 | 第5・6号住居跡出土遺物 |
| | | PL 12 | 第6号住居跡出土遺物 |
| | | PL 13 | 第33号土坑・第2号軍事施設跡・第5号軍事施設跡出土遺物 |
| | | PL 14 | 遺構外出土遺物 |
| | | PL 15 | 遺構外出土遺物 |
| | | PL 16 | 遺構外出土遺物 |

付図目次

実殺寺子西遺跡遺構全体図

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

阿見町と住宅・都市整備公団は、荒川本郷地区において良好な住環境を有する住宅の供給を行うための土地区画整理事業を進めている。

平成6年11月1日、住宅・都市整備公団つくば開発局は、茨城県教育委員会あてに事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会した。茨城県教育委員会は、11月2日～8日に現地踏査、11月28日～12月2日に試掘調査を実施し、平成7年2月20日に、実穀寺子遺跡、実穀寺墳群、北古辺古墳、実穀寺子西遺跡が所在することを、住宅・都市整備公団つくば開発局に回答した。

平成9年3月11日、住宅・都市整備公団つくば開発局は茨城県教育委員会あてに、実穀寺子西遺跡(21,751㎡)の取り扱いについて協議した。その結果、茨城県教育委員会は、3月17日、記録保存とする旨回答をし、調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。

財団法人茨城県教育財団は4月1日から発掘調査を開始したが、遺構数が少なく、調査が早期に終了する見込みとなったため、9月30日、財団法人茨城県教育財団は茨城県教育委員会あてに、発掘調査計画の変更について協議をした。10月13日、茨城県教育委員会は住宅・都市整備公団茨城地域支社(つくば開発局の名称変更)あてに発掘調査の変更について、事業の円滑な進捗を勘案して、実穀寺子西遺跡(21,751㎡)の調査終了後、新たに実穀寺子遺跡(2,974㎡)を調査し、併せて調査期間を3か月短縮する旨の協議をした。10月24日、住宅・都市整備公団茨城地域支社は茨城県教育委員会あてに、発掘調査計画の変更について、異議のない旨の回答をした。ただし、実穀寺子遺跡の一部(154㎡)は調査面積から除外された。10月31日、茨城県教育委員会は、財団法人茨城県教育財団あてに、発掘調査計画の変更について、調査期間を12月31日までとし、併せて当初の調査面積21,571㎡を24,391㎡とし、増加分2,820㎡については、実穀寺子遺跡を調査する旨の解答をし、調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。

平成10年3月1日、住宅・都市整備公団茨城地域支社は、茨城県教育委員会あてに実穀寺子遺跡(14,539㎡)、実穀寺子西遺跡(1,893㎡)の取り扱いについて協議した。3月13日、茨城県教育委員会は住宅・都市整備公団茨城地域支社あてに実穀寺子遺跡(14,539㎡)、実穀寺子西遺跡(1,893㎡)を記録保存とする旨の回答をし、調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。

6月30日、茨城県教育委員会は、住宅・都市整備公団茨城地域支社あてに実穀寺子遺跡、実穀寺子西遺跡の発掘調査計画について、開始時期を当初計画の7月1日から9月1日に変更し、調査期間を2か月短縮し、調査面積及び終了時期については変更しない旨の協議をした。8月27日、住宅・都市整備公団茨城地域支社は茨城県教育委員会あてに、荒川本郷土地区画整理事業に係わる発掘調査計画の変更について、異議のない旨の回答をした。

財団法人茨城県教育財団は9月1日から発掘調査に着手したが、遺構数が少なく、調査が早期に終了する見込みとなったため、11月9日、調査計画の変更について茨城県教育委員会に協議をした。11月18日、茨城県教育委員会は住宅・都市整備公団茨城地域支社あてに、実穀寺子遺跡、実穀寺子西遺跡の発掘調査の終了時期を当初計画の平成11年3月31日から平成10年12月31日に変更し、平成11年1月1日から3月31日までは実穀寺子遺跡と実穀寺子西遺跡の整理事業期間とする旨の協議をした。同10年12月14日、住宅・都市整備公団茨城地域

支社は、茨城県教育委員会あてに発掘調査計画の変更について、異議のない旨の回答をした。

なお、住宅・都市整備公団茨城地域支社は、平成11年10月1日、名称を都市基盤整備公団茨城地域支社と変更した。

第2節 調査経過

実設寺子西遺跡の発掘調査は、平成9年4月1日から平成9年12月31日までと、平成10年9月1日から平成10年12月31日までの期間実施した。以下、調査経過の概要を月ごとに記述する。

平成9年度

- 4月 8日に現場事務所と現場倉庫を立ち上げた。16日から室内補助員及び現場補助員を雇用し、現場事務所への発掘器材や物品の搬入等発掘調査の準備を行い、17日に試掘を実施した。
- 5月 1日に試掘が終了し、2日から人力による表土除去を実施した。
- 6月 前月に引き続き人力による表土除去を進めた。4日に表土除去が終了し、遺構確認作業を始め、12日までに土坑35基と溝6条を確認した。13日に遺構調査を開始し、27日からは遺構調査と並行して調査区西側の試掘を実施した。
- 7月 前月に引き続き土坑と溝の遺構調査と試掘を進め、27日に重機による試掘をした。
- 8月 前月に引き続き土坑と溝の遺構調査を進め、4日に軍事施設跡の遺構調査を開始した。8日から、遺構調査と並行して重機による表土除去を実施した。
- 9月 前月に引き続き、遺構調査と重機による表土除去を並行して進め、5日に重機による表土除去が終了した。8日から遺構調査と並行して遺構確認作業を実施した。11日に遺構確認作業が終了し、住居跡6軒を確認した。24日から軍事施設跡の遺構調査と並行して住居跡の遺構調査を実施した。
- 10月 前月に引き続き軍事施設跡と住居跡の遺構調査を進めた。
- 11月 前月に引き続き軍事施設跡と住居跡の遺構調査を進め、6日に報道発表を実施した。11日に現地説明会を開催した。
- 12月 前月に引き続き16日まで遺構調査を進めた。17日に委託者に発掘調査の成果の報告をし、補足調査を始めた。22日に補足調査を終了し、24日までには安全対策を含め現地調査をすべて終了した。

平成10年度

- 9月 1日に現場事務所への発掘器材と物品の搬入をし、発掘調査の諸準備をした。3日から室内補助員を、16日から現場補助員を雇用し、17日から遺跡の清掃を行った。
- 10月 8日に試掘を始め、15日に軍事施設跡の遺構確認図を作成した。19日に業者による立木伐採を行い、重機による表土除去を開始した。23日に表土除去が終了し、27日に遺構確認作業をした。軍事施設跡1基と土坑8基を確認した。
- 11月 5日から、軍事施設跡の遺構調査を実施した。
- 12月 前月に引き続き軍事施設跡の遺構調査を進めた。2日に報道発表を実施し、5日に現地説明会を開催した。8日から軍事施設跡の遺構調査を再開し、9日にヤスナによる航空写真撮影を実施した。11日から14日まで補足調査を行い、16日までに安全対策を含め現地調査をすべて終了した。

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

実穀寺子西遺跡は、茨城県稲敷郡阿見町実穀寺子地区に所在する。実穀寺子地区は阿見町南西部、JR常磐線荒川沖駅から南東に約3kmほどに位置する。

当遺跡は、茨城県南西部に広がる稲敷台地上に立地している。稲敷台地は、標高25～28mの洪積台地であり、土浦市、龍ヶ崎市、江戸崎町を結ぶ一角地帯の中にその大部分が入り、阿見町もその一角に入っている。阿見町の東部から東南部の台地は清明川、桂川、乙戸川とその支流の開析を受けている。当遺跡の南側を流れる乙戸川は、土浦市の乙戸沼を水源とし、牛久市の井の岡で桂川を合わせ、島田付近で小野川と合流し、霞ヶ浦に流入する。当遺跡は霞ヶ浦から6kmの距離がある。当遺跡付近では乙戸川の支流が台地を開析しており、乙戸川の河岸から延びる支谷は浅く長い。

当遺跡の立地は、乙戸川から北に延びる支谷の東側台地上で、乙戸川の河岸に開ける水田との比高は約7mである。

台地の地層は、第四紀洪積世古東京湾時代に堆積した成田層が基盤となり、下部から上部にかけて、成田層下部、成田層上部、龍ヶ崎砂礫層、常総粘土層、関東ローム層の順で堆積している。堆積状況は、水平かつ単調で、褶曲や断層はみられない。

調査前の現況は、畑・山林・雑種地である。

〔参考文献〕

- ・阿見町史編さん委員会 『阿見町史』 阿見町 1983年3月
- ・茨城県農地部農地課 『土地分類基本調査 土浦』 1983年12月

第2節 歴史的環境

1 旧石器時代から中世

実穀寺子西遺跡〈1〉周辺の旧石器時代の遺跡としては、^{ひしこ}実穀古墳群〈2〉、^{うつくろ}実穀寺子遺跡〈3〉がある。縄文時代の遺跡としては、^{つたしん}実穀寺子西遺跡、^{つたしん}実穀寺子遺跡、^{うつくろ}塚下遺跡〈4〉、^{うつくろ}道記遺跡〈5〉、^{しもこ}下小池遺跡〈6〉、^{しもこ}下小池東遺跡〈7〉、^{ふくだ}福山遺跡〈8〉がある。実穀寺子遺跡、下小池遺跡、下小池東遺跡では、縄文時代前期の土器が出土した。

弥生時代の遺跡としては、^{うつくろ}道記遺跡がある。

古墳時代の遺跡の占地は、縄文時代の遺跡とほぼ同じであり、乙戸川の両岸の台地上に点在している。

古墳時代前期の遺跡としては、^{うつくろ}下小池遺跡がある。

古墳時代中期の遺跡としては、乙戸川左岸の台地上には、^{ひしこ}実穀古墳群（^{うつくろ}集落遺跡）、^{うつくろ}実穀寺子遺跡、^{うつくろ}下小池遺跡が、乙戸川右岸の台地上には^{うつくろ}中根遺跡〈9〉がある。実穀寺子遺跡は5世紀中葉の時期の集落跡であり、住居跡から石製土器品が出土した。集落の北東部では方形周溝墓2基が検出された¹⁾。この時

期の集落では沖積低地を利用した農耕を中心に生活が営まれ、文化面では人和朝廷の影響が及んできていたと考えられる。

古墳時代後期の遺跡としては、下小池遺跡、下小池東遺跡がある。

古墳は、乙戸川兩岸の台地上に点在している。乙戸川左岸の台地上には、実穀古墳群、於山古墳(10)、大塚古墳(11)、北古辺古墳(12)、だめき古墳(13)があり、乙戸川の支流をはさんだ対岸の台地上には、塚越古墳群(14)がある。実穀古墳群は5世紀末から6世紀後半にかけて構築された古墳群であり、第4号墳から直刀が出土した。古墳群が営まれた時期の集落跡は確認されていない¹²⁾。乙戸川右岸の台地上には、内記古墳群(15)がある。小野川左岸の台地上には、琴塚古墳(16)、水落下古墳(17)がある。

奈良・平安時代の遺跡としては、福田遺跡がある。

中世の遺跡としては、乙戸川左岸に、上小池城跡(18)、下小池城跡(19)、福田城跡(20)がある。

以上のように、当遺跡周辺の乙戸川と小野川沿いの台地上は、各時代にわたり、人々が生活を営んできた跡が残っている。

2 近・現代

近代になり、阿見町の霞ヶ浦西岸に面した平坦な台地上と霞ヶ浦湖岸は、海軍の軍事施設が置かれ、重要な軍事拠点の一つとなった。当遺跡(①)北東約2-6kmの霞ヶ浦湖岸及び台地上に、第一海軍航空廠跡(②)と海軍兵学校卒業生の飛行学生や予科練習生の教育訓練をする、内戦部隊の第11連合航空隊所属の土浦海軍航空隊跡(③)、霞ヶ浦海軍航空隊跡(④)などの基地群、海軍軍需部霞ヶ浦支隊跡(⑤)、海軍経理部支隊跡(⑥)、海軍気象学校跡(⑦)、飛行艇格納庫跡(⑧)、中島飛行機製作所阿見出張所跡(⑨)等の関連施設群がある。当遺跡で確認された防空砲台跡は南砲台と呼ばれ、北砲台(⑩)とともに霞ヶ浦海軍航空隊基地を防衛する軍事施設であった。他に土浦海軍航空隊基地を防衛する青宿高地砲台跡(⑪)がある。

霞ヶ浦沿岸の台地上と湖岸にある海軍の軍事施設は、B29爆撃機やP51艦載機の空襲による被害を受け¹³⁾、阿見町は戦時災害地方に指定された。戦後、昭和26年に阿見町忠霊塔(⑫)が、30年に海軍航空殉職者慰霊塔(⑬)が、41年に予科練の碑(⑭)が建立された。

※文中の〈 〉内の番号は、表1・2、第1・2図中の該当番号と同じである。

註

- (1) 茨城県教育財団 「荒川本郷地区特定土地地区面整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅱ)実穀寺子遺跡2」『茨城県教育財団文化財調査報告』第151集 1999年
- (2) 茨城県教育財団 「荒川本郷地区特定土地地区面整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅰ)実穀古墳群・実穀寺子遺跡1」『茨城県教育財団文化財調査報告』第144集 1999年
- (3) 内山純子 「海軍航空隊と阿見地域」『阿見町史研究』第2号 1981年

参考文献

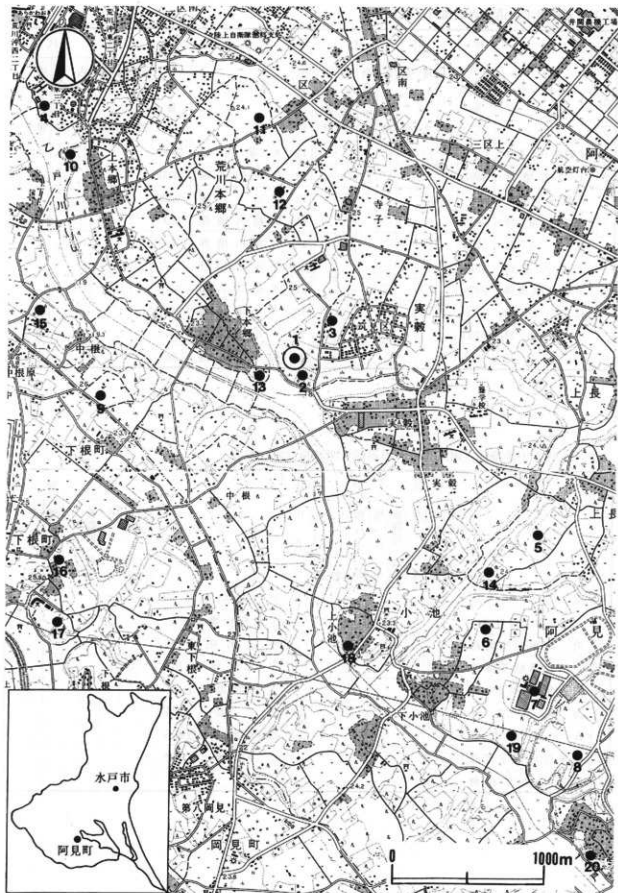
- ・阿見町史編さん委員会 「阿見町史」 1983年
- ・牛久市教育委員会 「牛久市史史料編」 1979年
- ・熊谷 直 「開戦時の陸海軍航空部隊」『太平洋戦争 陸海軍航空隊』成美堂出版株式会社 1979年
- ・十俊駿武 「戦争遺跡とは」『戦争遺跡は語る』かがわ出版 1999年

表1 実殺寺子西遺跡周辺遺跡一覧表

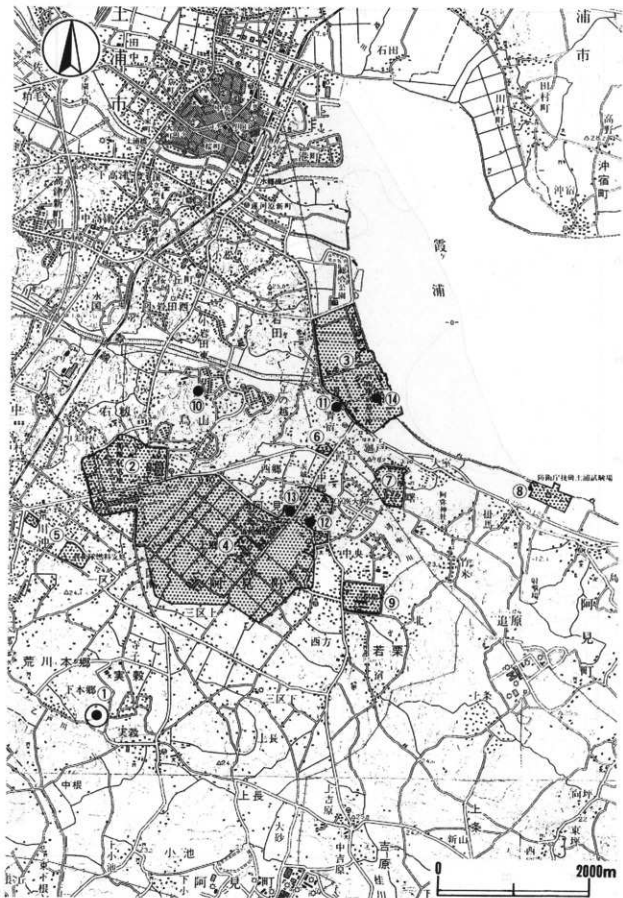
国 中 番 号	遺跡名	原 遺 跡 番 号	時 代					国 中 番 号	遺跡名	原 遺 跡 番 号	時 代										
			旧 石 器	縄 文 生	弥 生	古 墳	余 良 ・ 平 安				中 ・ 近 世	近 ・ 現 代	山 石	縄 文	弥 生	古 墳	余 良 ・ 平 安	中 ・ 近 世	近 ・ 現 代		
①	実殺寺子西遺跡			○		○		○	11	大塚古墳	5699										
2	実殺古墳群	5697	○			○			12	北古辺古墳	5700				○						
3	実殺寺子遺跡		○	○		○			13	だめき古墳	5698				○						
4	塚下遺跡	5240		○		○			14	塚越古墳群	5705				○						
5	遺記遺跡	5704		○		○			15	内記古墳群	5702				○						
6	下小池遺跡	3975		○		○			16	琴塚古墳群	3377				○						
7	下小池東遺跡	3976		○		○			17	水落下古墳	3378				○						
8	福山遺跡	5706		○		○	○		18	上小池城跡	3982									○	
9	中根遺跡	3703				○			19	下小池城跡	3975									○	
10	於山古墳	5701				○			20	福田城跡	3984									○	

表2 実殺寺子西遺跡（南砲台跡）周辺戦争関連施設跡一覧表

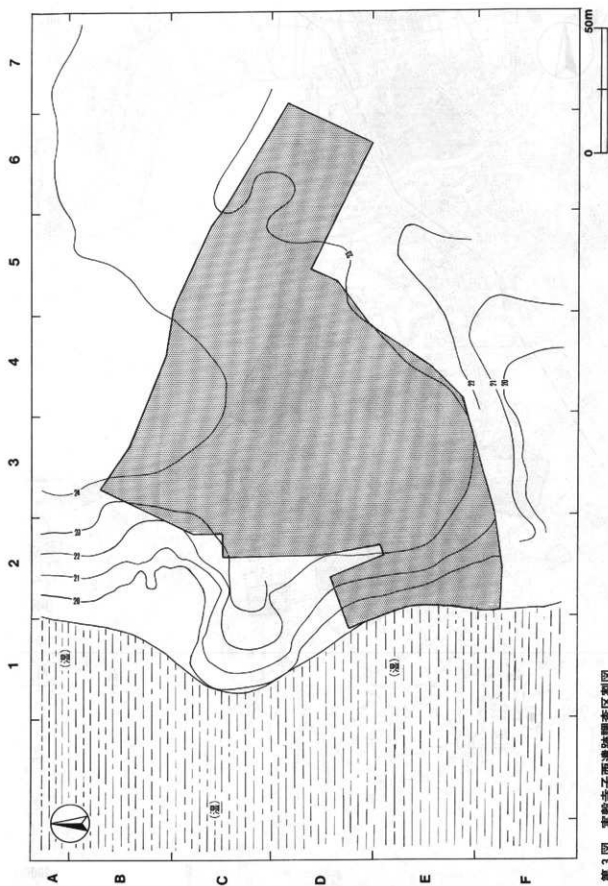
国 中 番 号	施設名	区 別							国 中 番 号	施設名	区 別									
		政 治 ・ 行 政	軍 事 ・ 防 衛	生 産	戦 闘 地 ・ 戦 場	居 住 地	埋 葬 地	交 通 他			政 治 ・ 行 政	軍 事 ・ 防 衛	生 産	戦 闘 地 ・ 戦 場	居 住 地	埋 葬 地	交 通 他			
①	南砲台跡 (実殺寺子西遺跡)		○						⑧	飛行艇格納庫跡		○								
②	第1海軍航空隊跡			○					⑨	中島飛行機製作所 阿見出張所跡			○							
③	上浦海軍航空隊跡								⑩	北砲台跡(馬山)		○								
④	霞ヶ浦海軍航空隊跡		○						⑪	青宿高地砲台跡		○								
⑤	海軍軍需部 霞ヶ浦支部跡		○						⑫	忠 堂 塔										○
⑥	海軍経理部支部跡		○						⑬	海軍航空殉職者慰霊塔										○
⑦	海軍気象学校跡		○																	○



第1図 実穀寺子西遺跡周辺遺跡分布図



第2図 実教寺子西遺跡(南砲台跡)周辺戦争関連施設跡分布図



第3图 芙蓉寺子西邊跡調查区剖面

第3章 調査の成果

第1節 遺跡の概要

実穀寺子西遺跡は、阿見町西北部、乙戸川左岸の標高23～24mの台地上に所在する。現況は山林及び畑地であり、調査面積は、平成9年度が $21,751\text{m}^2$ 、平成10年度が $1,893\text{m}^2$ である。当遺跡は、古墳時代中期の集落跡と近代の軍事施設跡であり、南で実穀古墳群に隣接している。当遺跡の北東約2～6kmの範囲には海軍の軍事施設跡群があり、当遺跡南東側調査区域外の雑木林内には、高角砲の砲床が露出した高角砲台跡が1基存在する。

検出された遺構は、竪穴住居跡6軒、井戸跡1基、土坑35基及び近代の軍事施設跡5基と溝4条である。遺物は、遺物収納箱(60×40×20cm)に16箱出土している。旧石器時代の石器(尖頭器)、剥片、縄文時代の縄文土器(深鉢片)、石器(石鏃)、古墳時代の土師器(坏・甗・高坏・埴・壺・甕・甌)、土製品(球状土鏃)、石製模造品(剣形品)、石製品(白玉・砥石)、ガラス玉、近代の防空兵器に伴う金属部品、鉄器(楯)等が出土している。

第2節 基本層序の検討

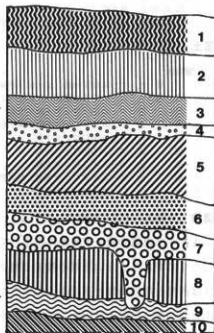
調査区内にテストピットを掘り、基本土層の観察を行った。表土除去後に土層確認をしたため、表土は図に表れていない。第1層上面で遺構の確認をした。観察の結果は以下の通りである(第4図)。

- 第1層 厚さ18～25cmの暗褐色土。炭化粒子とローム粒子を極少量含むソフトローム層である。
- 第2層 厚さ21～33cmの褐色土。炭化粒子とローム粒子を極少量含むソフトローム層である。
- 第3層 厚さ6～23cmの褐色土。ロームブロックを少量、ローム粒子を中量含む層である。A T層。
- 第4層 厚さ6～19cmの褐色土。黒色土ブロックを含む第2黒色帯(BBⅡ)である。
- 第5層 厚さ21～41cmの暗褐色土。炭化粒子と赤色スコリアを極少量含む第2黒色帯(BBⅡ)である。
- 第6層 厚さ5～19cmの暗褐色土。赤色スコリアを極少量含む立川ロームの最下層である。
- 第7層 厚さ14～20cmの褐色土。炭化粒子と粘土粒子を極少量含む武蔵野ローム層である。
- 第8層 厚さ6～27cmのむい褐色土。黒色粒子を極少量と粘土粒子を少量含む武蔵野ローム層である。

23.0 m -

22.0 -

21.0 -



第4図 基本土層図

第9層 厚さ7～16cmのぶい褐色土。黒色粒子と赤色粒子、粘土粒子、東京軽石（TP）を含み、極めて粘性がある。武蔵野ローム層である。

第10層 厚さ7～14cmの灰黄色粘土層。下末吉ローム層に対応する層である。

第3節 遺構と遺物

1 竪穴住居跡

竪穴住居跡6軒を確認した。以下、遺構と遺物について記載する。

第1号住居跡（第5・6・7図）

位置 調査区中央部、C3j9区。

規模と平面形 長軸3.85m、短軸3.70mの方形である。

主軸方向 N-70°-W

壁 壁高は35～42cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 平坦である。北壁側から炭化材が出土している。

貯蔵穴 北東コーナー部に位置し、長径85cm、短径71cmの楕円形で、深さは39cmである。底面は皿状である。

貯蔵穴土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック中量、炭化粒子微量
- 2 ぶい褐色 ローム小ブロック多量、炭化粒子微量

ピット 1か所。P1は、径25cmの円形で、深さは58cmである。性格は不明である。

炉 西壁寄りに位置し、径36cmの不整形円形で、床面を5cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床は、赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 暗褐色 焼土中ブロック多量、焼土大ブロック少量、炭化粒子微量
- 2 ぶい褐色 焼土小ブロック中量、炭化粒子微量

覆土 9層に分層された。ロームブロックを含み、人為堆積と考えられる。

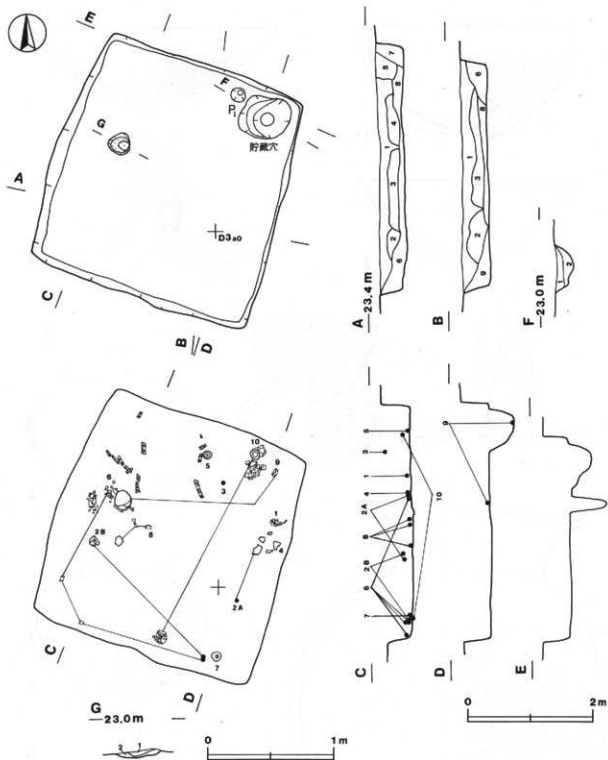
土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量、焼土粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土粒子微量
- 3 黒褐色 ローム小ブロック・粒子少量、焼土粒子微量
- 4 黒褐色 ローム小ブロック少量、焼土粒子微量
- 5 褐色 ローム中ブロック中量
- 6 褐色 ローム小ブロック中量
- 7 褐色 ローム中ブロック少量
- 8 褐色 ローム小ブロック多量、炭化物微量
- 9 褐色 ローム小ブロック多量

遺物 土師器片153点が出土している。1は椀で、北東コーナー部の覆土下層から出土している。2～4は高坏で、

2Aと4は東部の覆土下層から出土している。2Bは西部の覆土下層と南部の覆土中層から出土した破片が接合したものである。3は北部の覆土上層から出土している。5～8は埴で、5は北部の覆土下層から出土している。6は西部と南部の覆土下層から出土した破片が接合したものである。7は南東コーナー部の覆土下層から、8は中央部の覆土下層から出土している。9は竈で、北東コーナー部の覆土下層と西部の覆土下層から出土した破片が接合したものである。10は甕で、北部の覆土下層と南部の覆土下層から出土した破片が接合したものである。

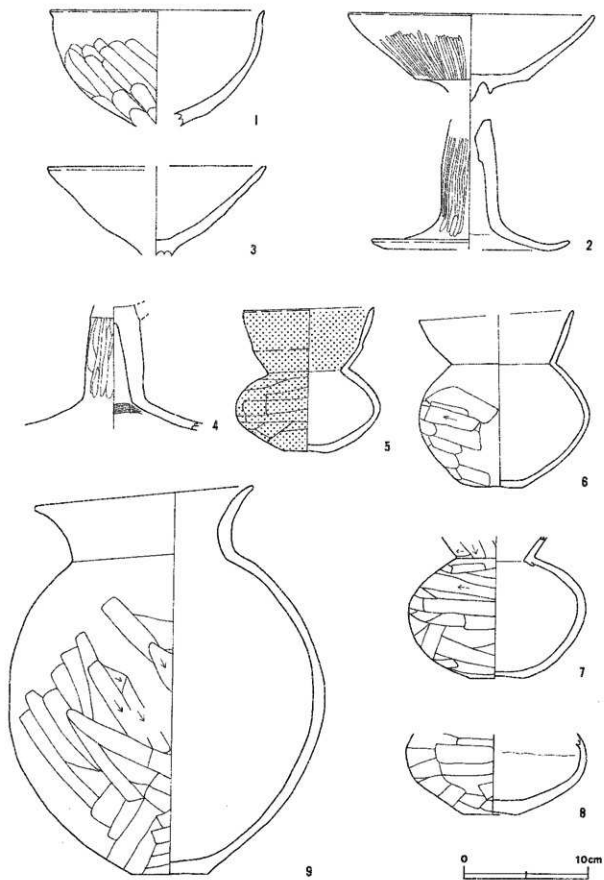
所見 本跡は、床面から焼土と炭化物が出土していることから、焼失家屋と思われる。本跡の時期は、出土土器から古墳時代中期（5世紀第2四半期頃）と考えられる。



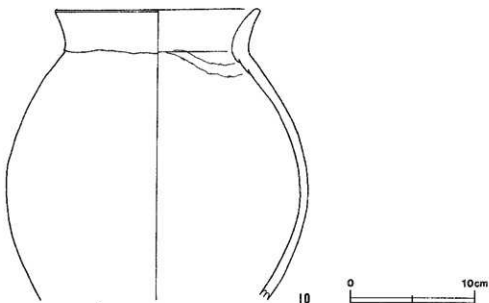
第5図 第1号住居跡実測図

第1号住居跡出土遺物観測表

図版番号	器種	計測値(m)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第6図 1	土師器	A 17.2 B (14.5)	底部欠損。体部14内壁して立ち上がり、口縁部は弱く外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ハラナデ。	長石・雲母・砂粒 に多い橙色 普通	P74 70% PL7 北東コーナー部覆 土下層



第6图 第1号住居跡出土遺物実測図(1)



第7図 第1号住居跡出土遺物実測図(2)

図版番号	器種	寸法(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第6図	高土師器	A 19.8	<p>坏部の破片。坏部は内唇外味に立ち上がり、下位に接を持つ。脚部との結合部はソケット状である。</p> <p>B(10.5) 脚部の破片。脚部は中空でわずかに膨らみを持つ。下位はラッパ状に開く。</p>	<p>口縁部内・外面横ナデ。坏部外面ヘラ磨き、内面磨減が著しいため磨減不明。</p> <p>脚部外面ヘラ磨き、内面ナデ。</p>	<p>長石・雲母・砂粒・スコリア</p> <p>にふい黄褐色</p> <p>普通</p>	<p>P1A 45% PL7 東部覆土下層</p> <p>A・Bは同一個体</p> <p>P1B 30% PL7 西部覆土下層・南部覆土中層</p>
		B (7.1)				
		B(10.5)				
		D(16.0)				
第3図	高土師器	A(16.4)	<p>坏部の破片。坏部は外縁して立ち上がり、下位に深い接を持つ。</p>	<p>口部内・外面ナデ。</p>	<p>長石・雲母・砂粒・棕色</p> <p>普通</p>	<p>P2 10% PL7 北部覆土上層</p>
		B(7.4)				
第4図	高土師器	B(10.0)	<p>脚部の破片。脚部は中空で、わずかに膨らみを持つ。裾部はハの字状に開く。</p>	<p>脚部外面ヘラ磨き、内面ナデ。</p>	<p>長石・雲母・砂粒</p> <p>にふい橙色</p> <p>普通</p>	<p>P3 35% PL7 東部覆土下層</p>
第5図	土師器	A 10.4	<p>体部は横に張り出す。口縁部は内唇外味に立ち上がり、中位に深い接を持つ。</p>	<p>口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り。口縁部内・外面、体部外面赤彩。</p>	<p>長石・雲母・砂粒・スコリア</p> <p>にふい橙色 普通</p>	<p>P4 95% PL7 北部覆土下層</p>
		B 11.8				
		C 3.6				
第6図	土師器	A 12.5	<p>体部は横に張り出し、口縁部は外縁して立ち上がる。</p>	<p>口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り。</p>	<p>長石・雲母・砂粒・スコリア</p> <p>にふい橙色 普通</p>	<p>P5 70% PL7 北西部・南部覆土下層</p>
		B 14.2				
		C 4.0				
第7図	土師器	B(11.3)	<p>体部は横に張り出し、口縁部は外縁する。</p>	<p>口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り。</p>	<p>砂粒・スコリア</p> <p>にふい橙色 普通</p>	<p>P6 90% PL7 南東コーナー・北西部覆土下層</p>
		C 4.6				
第8図	土師器	B(6.3)	<p>底部から体部の破片。体部は横に張り出している。</p>	<p>体部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ。</p>	<p>石英・砂粒</p> <p>にふい橙色 普通</p>	<p>P7 35% PL7 中央部覆土下層</p>
第9図	土師器	A 17.4	<p>体部はやや板長の球形である。頸部は直立し、口縁部は外反する。</p>	<p>口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ。</p>	<p>石英・雲母・砂粒</p> <p>にふい黄褐色</p> <p>普通</p>	<p>P8 90% PL7 北東コーナー部・西部覆土下層</p>
		B 31.4				
		C 6.0				
第10図	土師器	A 16.4	<p>体部から口縁部の破片。体部は、中位に最大径を持つ。口縁部は外反する。</p>	<p>口縁部内・外面横ナデ。体部外面ナデ。</p>	<p>長石・雲母・砂粒・赤色粒</p> <p>橙色 普通</p>	<p>P9 65% PL7 北部・南部覆土下層</p>
		B(23.4)				

第2号住居跡（第8・9・10・11区）

位置 調査区中央部，C3h0区。

規模と平面形 長軸7.17m，短軸6.55mの方形である。

主軸方向 N-54°-W

壁 壁高は34-55cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

盤溝 南コーナー部付近を除き，巡る。上幅11-21cm，下幅3-16cm，深さ4-10cmで，断面形はU字状である。

床 南コーナー部からP₃，P₅にかけて6cmほどの高まりがあるが，他は平坦である。中央部が硬い。壁側から，焼土と炭化材が出土している。

貯蔵穴 南コーナー部に位置し，径90cmの円形で，深さは50cmである。底面は皿状である。

貯蔵穴土層解説

- 1 褐色 rome 粒子・焼土粒子多量，炭化物少量
- 2 褐色 rome 小ブロック多量，焼土粒子微量
- 3 褐色 rome 中・小ブロック中量，焼土粒子少量

ピット 9か所（P₁-P₉）。P₁は径30cmの円形で，深さは70cmである。P₂は長径28cm，短径20cmの楕円形で，深さは75cmである。P₃は径29cmの円形で，深さは77cmである。P₄は長径33cm，短径25cmの楕円形で，深さは29cmである。P₁-P₄は主柱穴である。P₅は長径45cm，短径30cmの楕円形で，深さは30cmである。出入り施設に伴うピットと思われる。P₆-P₉は長径25-36cm，短径18-30cmの円形及び楕円形で，深さは10-78cmである。性格は不明である。

炉 北西壁寄りに位置し，長径76cm，短径47cmの楕円形で，床面を5cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉床は，赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土大ブロック多量，焼土小ブロック中量，炭化粒子少量

覆土 9層に分層された。rome ブロックを含み，人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 rome 中ブロック・小ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 rome 小ブロック・粒子中量，rome 中ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 rome 粒子多量，rome 中・小ブロック中量，炭化粒子少量，焼土粒子微量
- 4 暗褐色 rome 粒子中量，rome 中ブロック・rome 小ブロック・炭化粒子少量，焼土粒子微量
- 5 暗褐色 rome 粒子多量，rome 中ブロック・rome 小ブロック・炭化物・炭化粒子中量，焼土粒子少量
- 6 褐色 rome 粒子多量，rome 小ブロック・炭化物・炭化粒子少量，rome 中ブロック・焼土粒子微量
- 7 暗褐色 炭化物・炭化粒子・rome 粒子多量，rome 小ブロック中量，焼土粒子微量
- 8 褐色 rome 粒子多量，rome 中ブロック・rome 小ブロック・炭化物・炭化粒子少量，焼土粒子微量
- 9 暗褐色 rome 粒子多量，rome 中・小ブロック中量，炭化物・炭化粒子少量，焼土粒子微量

遺物 土師器片317点，土製品1点，石器6点が出土している。1は竈で，西壁側の覆土下層から出土している。2-5は高坏である。2は東コーナー部の覆土下層から出土している。4は中央部と南部の覆土下層から出土した破片が接合したものである。5は入り口付近の。3は東部の覆土下層から出土している。6・7は埜で，6は入り口付近の覆土中層から，7は南コーナー部の覆土下層から出土している。8は壺で，南部の覆土下層から出土している。9-11は甕で，9・10は西壁側の覆土下層から，11は北部の覆土中層から出土している。12は西壁側覆土下層から出土している。13の球状土鏝は中央部の覆土中層から出土している。14-17の白玉は，西コーナー部の覆土下層から出土している。

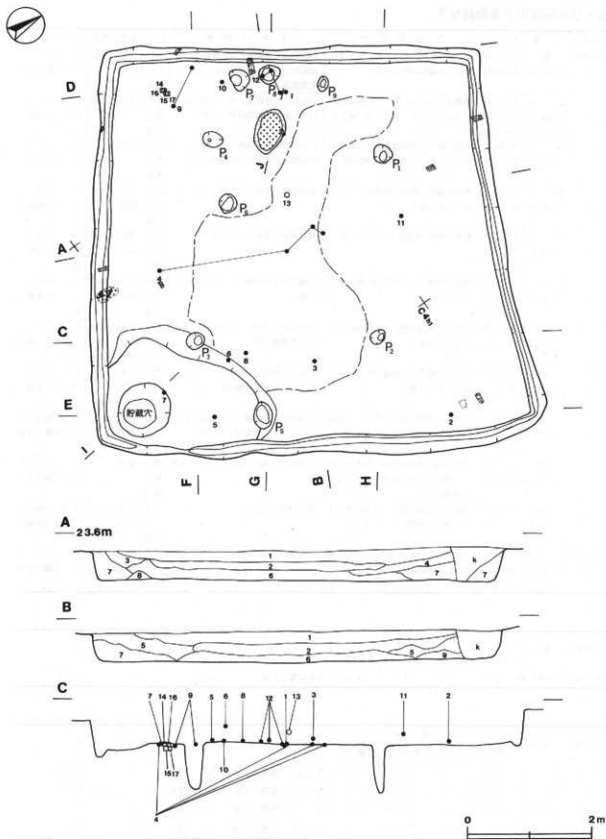
所見 本跡は，床面から焼土と炭化物が出土していることから，焼失家屋と思われる。本跡の時期は，出土土器から古墳時代中期（5世紀第2四半期頃）と考えられる。

第2号住居跡出土遺物観察表

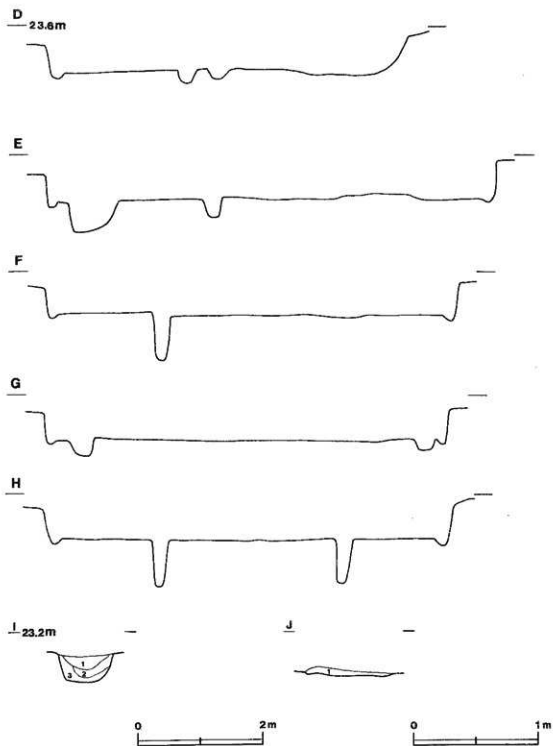
図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色澤・地産	備考
第10図 1	陶 土 師器	A 15.6 B (10.6)	底部はわずかに突出する。体部は内脚し、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部上位外面縦位のヘラナデ、以下はヘラ削り、内面磨減。	長石・雲母・砂粒にふい橙色 普通	P10 85% PL8 西壁側覆土下層
2	高 土 師器	A 17.8 B 13.8 D (14.0)	脚部はハの字状に開く。坏部は内脚して立ち上がり、下位は弱い縁を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面下位ヘラ削り。脚部外面ヘラ磨き。	石英・雲母・砂粒 藍色 普通	P11 60% PL8 東コーナー部覆土下層
3	高 土 師器	A 19.2 B (6.3)	坏部の破片。坏部はわずかに内脚して立ち上がり、下位に弱い縁を持つ。	坏部外面ナデ。外面下位ヘラ削り、内面磨減が著しいため調整不明。	雲母・砂粒 棕色 普通	P12 40% PL8 東部覆土下層
4	高 土 師器	B (6.9) D 15.4	脚部の破片。脚部は中家で、下位はラッパ状に開く。	脚部外面ヘラ磨き、内面ヘラナデ。	長石・雲母・砂粒にふい橙色 普通	P13 35% PL8 中央部・南部覆土下層
5	高 土 師器	B (7.0)	脚部の破片。脚部はハの字状に開く。	脚部外面ヘラ削り、内面ナデ。	長石・雲母・砂粒にふい橙色 普通	P14 25% PL8 入り口付近覆土下層
6	埴 土 師器	A (9.2) B 8.6 C 3.2	体部は内脚し、口縁部は内脚尖頭に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り。	長石・雲母・砂粒にふい橙色 普通	P15 60% PL8 南コーナー部覆土中層
7	埴 土 師器	B (4.8) C 3.2	底部から体部の破片。体部は内脚して立ち上がる。	体部外面ヘラ削り、内面磨減が著しいため調整不明。	石英・雲母・砂粒・赤色粒子 にふい橙色 普通	P16 15% PL8 南コーナー部覆土下層
8	壺 土 師器	A (17.6) B (3.0)	口縁部の破片。口縁部は折り返し口縁で、外反する。	口縁部上位内・外面横ナデ。下位は損傷による押圧が施されている。	雲母・砂粒にふい橙色 普通	P17 10% PL8 南部覆土下層
9	甕 土 師器	A 17.0 B 25.1	丸底で、体部は球形である。口縁部は直立したのち上位で外反する。	口縁部内・外面横ナデ。頸部は縦位のヘラナデ。体部外面ヘラ削り。	長石・砂粒にふい黄棕色 普通	P18 80% PL8 西壁側覆土下層
10	甕 土 師器	A 17.8 B (24.0)	底部欠損。体部は中位に最大径を持つ。頸部はくの字状を呈し、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面、体部外面ハゲ目調整。	雲母・砂粒 藍色 普通	P19 70% PL8 西壁側覆土下層
11	甕 土 師器	B (6.4) C (7.0)	底部から体部の破片。底部は突出する。体部は内脚して立ち上がる。	体部外面ヘラ削り。	石英・雲母・砂粒にふい橙色 普通	P21 10% PL8 北部覆土中層
第11図 12	甕 土 師器	A (14.8) B (10.0)	体部から口縁部の破片。体部は内脚し、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナデ。	長石・雲母・砂粒にふい橙色 普通	P20 15% PL8 西壁側覆土下層

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
第11図13	埴土師器	2.4	2.8	0.5	(14.0)	中央部覆土中層	DP1 PL8

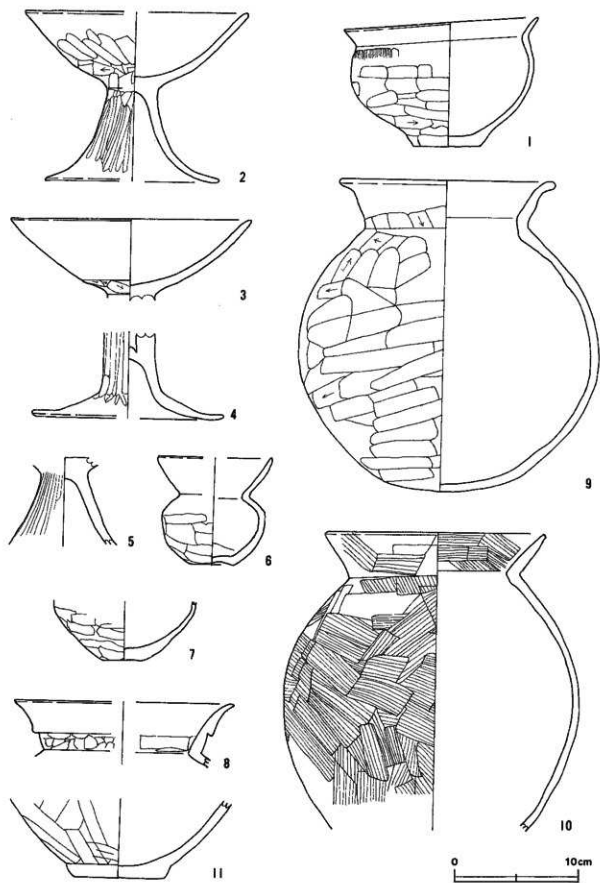
図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
14	白玉	0.4	0.4	0.10	0.11	西コーナー部覆土下層	Q1 滑石 PL8
15	白玉	0.4	0.3	0.10	0.05	西コーナー部覆土下層	Q2 滑石 PL8
16	白土	0.35	0.3	0.10	0.10	西コーナー部覆土下層	Q3 滑石 PL8
17	白土	0.4	0.3	0.15	(0.04)	西コーナー部覆土下層	Q4 滑石 欠損 PL8



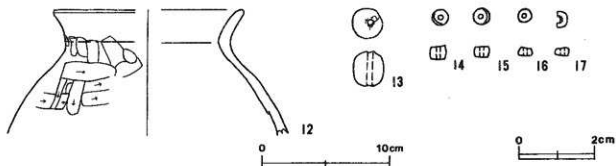
第8图 第2号住居跡実測图(1)



第9图 第2号住居跡実測图(2)



第10图 第2号住居跡出土遺物実測図(1)



第11図 第2号住居跡出土遺物実測図(2)

第3号住居跡 (第12・13・14図)

位置 調査区北部、C4Ⅱ区。

規模と平面形 長軸6.70m、短軸6.67mの方形である。

主軸方向 N-42°-W

壁 壁高は16~30cmで、外傾して立ち上がる。

床 全体的に平坦で、中央部が硬い。焼土が出土している。

貯蔵穴 南コーナー部に位置し、径87cmの円形で、深さは35cmである。底面は平坦である。

ピット 7か所 (P₁~P₇)。P₁は長径38cm、短径31cmの楕円形で、深さは76cmである。P₂は径48cmの円形で、深さは7cmである。P₃は径45cmの円形で、深さは76cmである。P₄は径35cmの円形で、深さは74cmである。P₁~P₄は主柱穴である。P₅~P₇は、長径23~75cm、短径18~63cmの円形及び楕円形で、深さは43~54cmである。性格は不明である。

炉 ほぼ中央に位置し、径54cmの円形で、床面を4cmほど皿状に掘りくぼめた地床がである。炉床は、赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 明赤褐色 焼土大ブロック多量、焼土粒少量

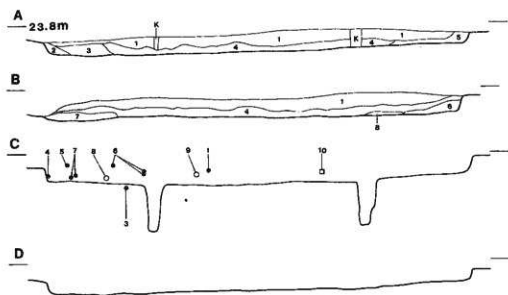
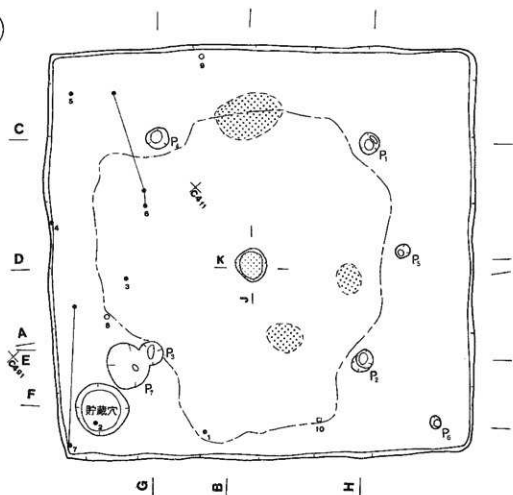
覆土 8層に分層された。ロームブロックを含み、人為堆積と考えられる。

土層解説

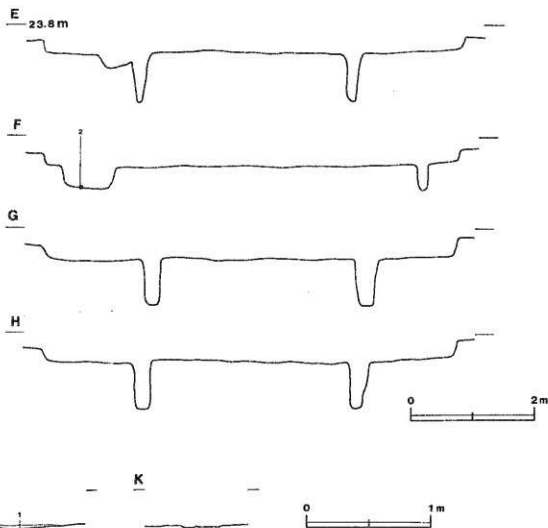
- 1 黒褐色 ローム小ブロック中量、ローム粒子少量、焼土粒微量
- 2 明褐色 ローム中ブロック中量
- 3 褐色 ローム中ブロック・炭化物少量
- 4 暗褐色 ローム小ブロック中量、ローム中ブロック・炭化物少量
- 5 褐色 ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量
- 6 不揃い褐色 ローム中ブロック多量、炭化物微量
- 7 褐色 ローム粒子多量、ローム中ブロック少量、炭化物微量
- 8 明赤褐色 焼土粒子多量、ローム小ブロック中量、炭化物微量

遺物 土師器片408点、土製品2点、石製品1点が出土している。1~3は坏で、1は南東部の覆土中層から、3は南西部の覆土下層から、2は貯蔵穴底面から出土している。4・5は高坏で、4は南西壁側の覆土下層から、5は西コーナー部の覆土上層から出土している。6は埴で、西コーナー部の覆土上層から出土した破片と覆土中層から出土した破片が接合したものである。7は罫で、南コーナー部の覆土下層から出土した破片と覆土中層から出土した破片が接合したものである。10は砥石で、南東部の覆土中層から出土している。8・9は球状土釜で、8は南西壁側の覆土下層から、9は北西部の覆土中層から出土している。

所見 本跡は、床面から焼土が出土していることから、焼失家屋と思われる。本跡の時期は、出土土器から古墳時代中期(5世紀第2四半期頃)と考えられる。



第12图 第3号住居跡実測图(1)



第13図 第3号住居跡実測図(2)

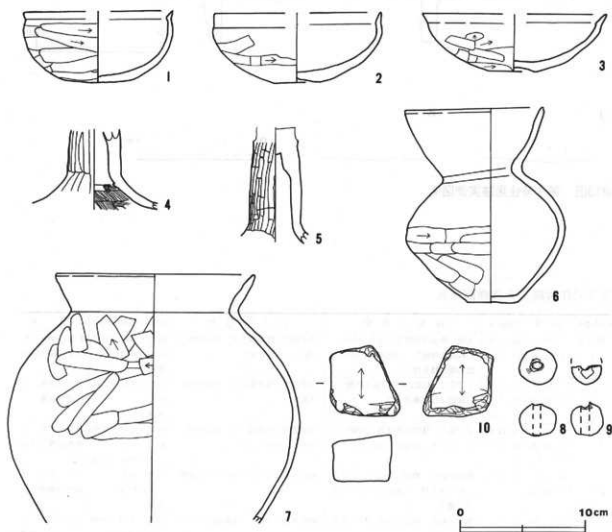
第3号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第14図 1	土師器 杯	A (11.8)	丸底。体部は内彎して立ち上がる。 口縁部は外傾し、口縁部と体部の内 面の境に稜を持つ。	口縁部内・外向横ナデ。体部外面へ ラ削り、内面ナデ。	長石・雲母・砂粒 にふい黄褐色 普通	P22 50% PL9 南東部覆土中層
		B 5.7				
2	土師器 杯	A 13.4	上げ底で、体部は上位で強く内彎し、 口縁部はほぼ垂直する。	口縁部内・外向横ナデ。体部外面へ ラ削り。	石英・雲母・砂粒 褐色 普通	P23 30% PL9 町蔵穴或面
		B 5.6				
		C 3.6				
3	土師器 杯	A (14.6)	上げ底で、体部はわずかに内彎して 立ち上がる。口縁部は外反する。	口縁部内・外向横ナデ。体部外面へ ラ削り、内面へラ磨き。	石英・砂粒・赤色 粒子 にふい褐色 普通	P24 25% PL9 南西部覆土下層
		B 4.6				
		C 3.5				
4	高土師器 土師器	B (6.5)	胴部の破片。胴部は中空で、わずかに 影らみを持つ。胴部下位はハの字 状に開く。	胴部外面へラ削り、内面ハケ目調整。	尖砂・砂粒 にふい褐色 普通	P25 15% PL9 南内壁側覆土下層
		A (9.3)				
5	高土師器 土師器	B (9.3)	胴部の破片。胴部は中空で、わずかに 影らみを持つ。	胴部外面へラ削り、内面縦位のナデ。	長石・雲母・砂粒 にふい黄褐色 普通	P26 15% PL9 西コーナー部覆土 上層
		A (9.3)				

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第14図 6	埴 土 埴 器	A 11.1	平底で、体部は横に張り出す。口縁部 は内彎気味に外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へ ラナデ。	長石・砂粒 赤色 普通	P27 60% PL9 西コーナー部覆土 上・中層
		B 15.7				
		C 4.1				
7	甕 土 埴 器	A 15.8	体部から口縁部の破片。体部は内彎 し、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へ ラ削り。	炭粒・砂粒・赤色 粒子 にぶい黄褐色 普通	P28 60% PL9 南コーナー部覆土 下層・覆土中層
		B (19.9)				

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
第14図8	球状土師	2.9	2.5	0.6	(18.0)	南西角部覆土下層	DP2 PL9
9	球状土師	2.5	2.7	0.6	(7.0)	北西角部覆土中層	DP3 PL9

図版番号	種別	計測値				石質	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
10	砥石	(5.6)	5.6	3.7	(160.0)	凝灰岩	Q5 南東部覆土中層 PL9



第14図 第3号住居跡出土遺物実測図

第4号住居跡 (第15・16図)

位置 調査区北部, C3e9区。

規模と平面形 長軸6.56m, 短軸6.51mの方形である。

主軸方向 N-33°-E

壁 壁高は22~34cmで, 外傾して立ち上がる。

床 全体的に平坦である。

ピット 5か所 (P₁~P₅)。P₁は径24cmの円形で, 深さは20cmである。P₂は径26cmの円形で, 深さは44cmである。P₃は長径23cm, 短径20cmの楕円形で, 深さは65cmである。P₄は径33cmの円形で, 深さは15cmである。P₁~P₄は上柱穴である。P₅は長径72cm, 短径61cmの楕円形で, 深さは30cmである。性格は不明である。

覆土 12層に分層された。ロームブロックを含み, 人為堆積と考えられる。

土層解説

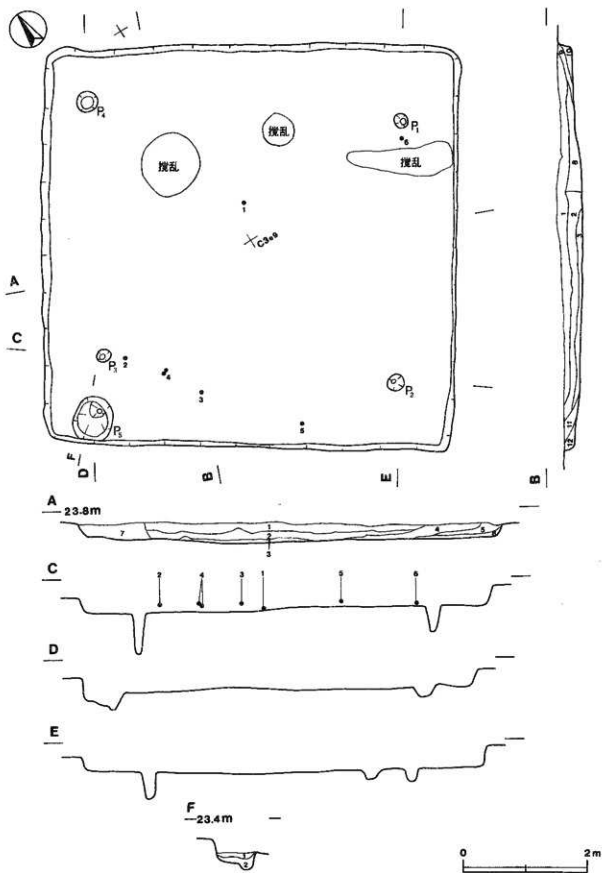
- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック・粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量
- 5 褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子少量
- 6 褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量
- 7 褐色 ローム小ブロック・粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 8 暗褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 9 褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量
- 10 褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量
- 11 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量
- 12 褐色 ローム粒子中量

遺物 土師器片330点, 石製品1点(砥石)が出土している。1は竈で, 中央部の覆土下層から出土している。2・3は高坏で, 南西コーナー部の覆土中層からそれぞれ出土している。4は埴で, 南西コーナー部の覆土中層から出土している。5は壺で, 南壁側の覆土中層から出土している。6は甕で, 東部の覆土下層から出土している。

所見 本跡の時期は, 出土土器から古墳時代中期(5世紀第2四半期頃)と考えられる。

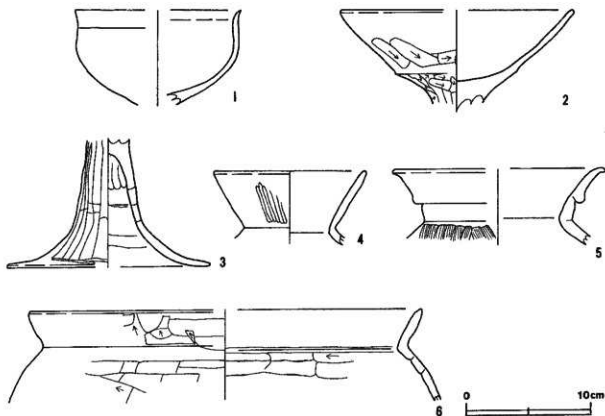
第4号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第16図 1	竈 土師器	A(13.2)	底部欠損, 体部は内傾して立ち上がり, 口縁部は弱く外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ナデ。	長石・石英・雲母・砂粒 棕色 普通	P20 20% PL9 中央部覆土下層
		B(7.6)				
2	高坏 土師器	A(18.4)	坏部の破片。坏部はわずかに内傾して立ち上がり, 下位に縁を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面ナデへう削り。	長石・石英・雲母・砂粒 砂粒 明赤褐色 普通	P30 25% PL9 南西コーナー部覆土中層
		B(8.3)				
3	高坏 土師器	B(10.2)	脚部の破片。脚部は中空で, ハの字状に開く。	脚部外面へう削り, 内面へらナデ。	長石・雲母・砂粒 棕色 普通	P31 30% PL9 南西コーナー部覆土中層
		D(16.4)				
4	埴 土師器	A(12.0)	口縁部の破片。口縁部は外傾する。	口縁部外面へう削き, 内面縦位のナデ。	長石・石英・雲母・砂粒・赤色粒子 棕色 普通	P32 30% PL9 南西コーナー部覆土中層
		B(5.9)				
5	壺 土師器	A(16.6)	口縁部の破片。頸部は4枚直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部上位外面縦位のへらナデ。	長石・雲母・砂粒 にぶい棕色 普通	P33 5% PL9 南壁側覆土中層
		B(6.2)	口縁部は折り返し, 外反する。			



第15图 第4号住居跡実測図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第16図 6	壺 土師器	A (30.2) B (7.5)	体部上位から口縁部の破片。口縁部は外傾する。	口縁部内・外面ヘラナデ。体部外面横位のヘラナデ、内面ヘラナデ。	赤土・砂粒・赤色 控子 にぶい褐色 普通	P34 5% P1.9 東部遺土下層



第16図 第4号住居跡出土遺物実測図

第5号住居跡 (第17・18・19図)

位置 調査区北西部, C 3 b6区。

規模と平面形 長軸3.59m, 短軸3.32mの方形である。

主軸方向 N-77°-W

壁 壁高は48-62cmで、外傾して立ち上がる。

床 全体的に平坦で、南壁から中央部にかけて硬い。

貯蔵穴 南東コーナー部に位置し、長径77cm, 短径61cmの楕円形で、深さは28cmである。底面は皿状である。

貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック少量、粘土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム中・小ブロック少量

ピット 3か所 (P₁-P₃)。P₁は長径28cm, 短径20cmの楕円形で、深さは8cmである。P₂は長径28cm, 短径24cmの楕円形で、深さは7cmである。P₃は長径25cm, 短径15cmの楕円形で、深さは15cmである。性格は不明である。

炉 西壁寄りに位置し、長径53cm, 短径43cmの楕円形で、床面を3cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床は、赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土粒子多量、ローム小ブロック少量

覆土 6層に分層された。ロームブロックを含み、人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒色 ローム中ブロック・小ブロック・粒子少量、焼土粒子微量
 2 黒褐色 ローム中ブロック・粒子中量
 3 褐色 ローム中ブロック・粒子少量
 4 黒褐色 ローム粒子中量、炭化粒少量
 5 褐色 ローム中ブロック多量、ローム小ブロック少量、炭化粒少量
 6 黒褐色 ローム粒子中量、炭化物・焼土粒子少量

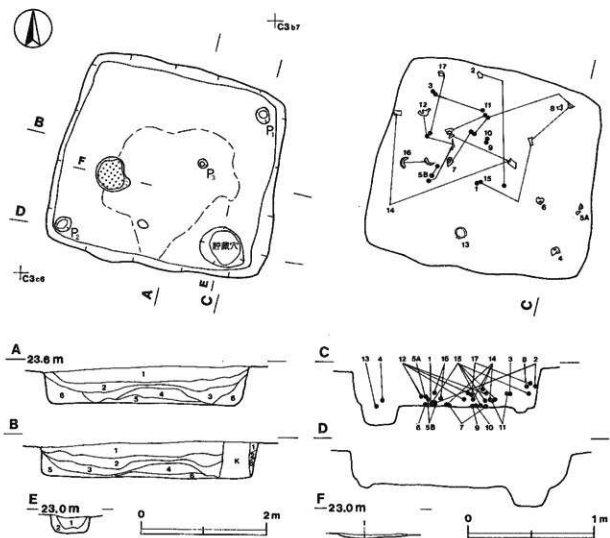
遺物 土師器片111点、石製品1点（器種不明）が出上している。1は坏で、中央部の覆土下層から出土している。2-9は高坏である。2は中央部の覆土下層から出土した破片と北壁側の覆土中層から出土した破片が接合したものである。3は北西コーナー部の、8は東コーナー部の、それぞれ覆土中層から出土している。4は南東コーナー部の、6は東部の、7と9は中央部の、それぞれ覆土下層から出土している。5は南東壁側と炉側の覆土下層から出土している。10は埴で、中央部の覆土下層から出土している。11-17は甕である。11は北コーナー部の覆土中層から、12は北西部の覆土中層から、13は南部の覆土下層から出土している。14は西部の覆土下層から出土した破片及び中央部の覆土中層から出土した破片と北部の覆土中層から出土した破片が接合したものである。15は中央部の覆土下層、東部と北部の覆土中層から出土した破片が接合したものである。16は西部の覆土中層から、17は北コーナー部の覆土中層からそれぞれ出土している。

所見 本跡の時期は、出土土器から古墳時代中期（5世紀第2-4半期頃）と考えられる。

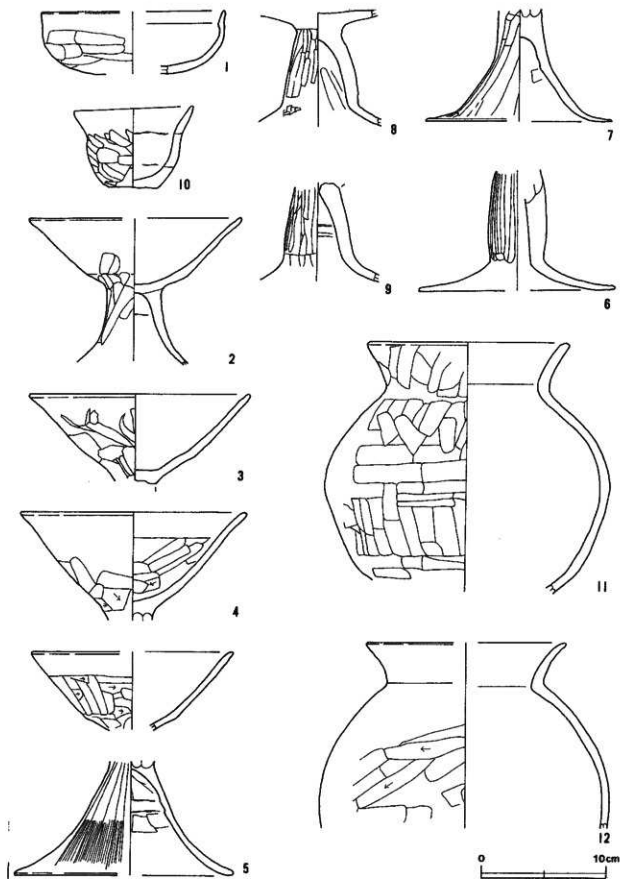
第5号住居跡出土遺物観察表

図録番号	器種	寸法(mm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・地成	備考
第18図	土師器	A(14.6)	底部欠損。腰部は上部で強く内彎し、口縁部はわずかに外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。腰部外面ヘラ削り。	長石・石英・雲母・砂粒 赤褐色	P35 20% PL10 中央部覆土下層
		B(5.1)				
2	高坏	A(16.8)	脚部はラッパ状に開く。坏部は下位に後を持ち、外反しながら立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面下位ヘラナデ。脚部外面斜位のヘラ削り。	長石・雲母・砂粒・赤色粒子 赤褐色 普通	P36 60% PL10 中央部覆土下層・北壁側覆土中層
		B(11.8)				
3	高坏	A(17.7)	坏部の破片。坏部は下位に弱い後を持ち、わずかに外反しながら立ち上がる。	坏部上位内・外面横ナデ。坏部中位以下外面ヘラナデ。	長石・雲母・砂粒 赤褐色	P37 50% PL10 北西コーナー部覆土中層
		B(7.2)				
4	高坏	A(18.0)	坏部の破片。坏部は下位に弱い後を持ち、わずかに外反しながら立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。以下内・外面ヘラナデ。	長石・砂粒・赤色 赤褐色	P38 40% PL10 南東コーナー部覆土下層
		B(8.7)				
5	高坏	A(16.0)	坏部の破片。坏部は下位に後を持ち、外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。以下外面ヘラ削り。	雲母・砂粒 赤褐色	P30A 30% PL10 南東壁側覆土下層
		B(6.3)				
		B(9.3)				
		D(17.6)				
6	高坏	A(9.7)	脚部の破片。脚部は中空で、中位に膨らみを持つ。裾部はラッパ状に開く。	脚部外面ヘラ削り。内面ナデ。	長石・雲母・砂粒 褐色 普通	P40 30% PL10 東部覆土下層
		D(15.8)				
7	高坏	B(9.7)	脚部と坏部の破片。脚部はラッパ状に開く。	坏部下位外面縦位のヘラ削り。脚部内面ハケ目調整。	雲母・砂粒 赤褐色	P41 20% PL10 中央部覆土下層
		D(15.0)				
8	高坏	B(9.5)	脚部の破片。脚部は中空で、膨らみを持つ。裾部はハの字状に開く。	脚部外面縦位のヘラ削り。内面ヘラナデ。	雲母・砂粒 赤褐色 普通	P42 15% PL10 東コーナー部覆土中層
		B(7.9)				
9	高坏	B(7.9)	脚部の破片。脚部は中空で、わずかに膨らみを持つ。裾部はハの字状に開く。	脚部外面縦位のヘラ削り。内面ヘラナデ。	砂粒・スコリア 赤褐色 普通	P43 10% PL10 中央部覆土下層
		B(7.9)				
10	埴	A(9.5)	平底で、腰部はわずかに内彎する。口縁部は外傾して立ち上がり、上位は内彎気味に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。腰部外面ヘラ削り。内面ナデ。輪積み痕。	長石・雲母・砂粒 褐色 普通	P44 95% PL10 中央部覆土下層
		B(6.6)				
		C(3.8)				

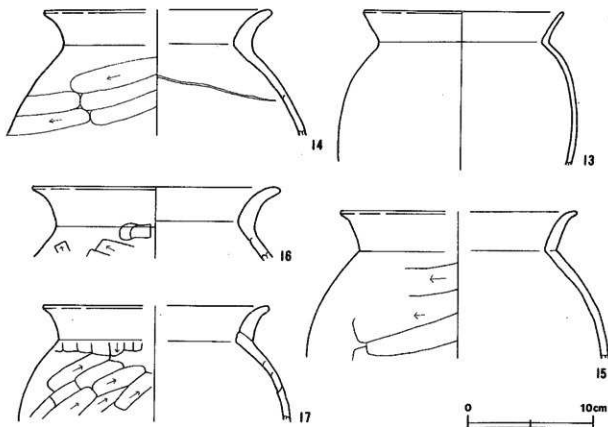
円周番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第18回 11	甕 土師器	A 15.8 B (20.1)	体部から口縁部の破片。体部は内彎し、口縁部は外反する。	口縁部外面ヘラナデ。体部外面ヘラナデ。	長石・石英・赤緑・砂粒 にぶい褐色 普通	P45 65% PL11 北コーナー一部覆土中層
12	甕 土師器	A (15.8) B (14.9)	体部から口縁部の破片。体部は内彎し、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。	雲母・砂粒・赤色 粒状 灰黄褐色 普通	P46 45% PL11 北西部覆土中層
第19回 13	甕 土師器	A 15.9 B (12.2)	体部から口縁部の破片。体部は内彎し、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	長石・石英・砂粒 褐色 普通	P47 30% PL10 南部覆土下層
14	甕 土師器	A (18.0) B (10.0)	体部から口縁部の破片。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。内面に輪積み痕を残す。	赤緑・砂粒・赤色 粒状 にぶい褐色 普通	P48 20% PL10 内部覆土下層, 中央部・北部覆土中層
15	甕 土師器	A (18.6) B (11.7)	体部から口縁部の破片。体部は内彎し、口縁部は上位で外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナデ。内面ヘラナデ。	雲母・砂粒・赤色 粒状 褐色 普通	P49 15% PL10 中央部覆土下層, 東部・北部覆土中層
16	甕 土師器	A 19.6 B (5.8)	体部から口縁部の破片。口縁部は強く外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナデ。内面ナデ。	石英・赤緑・砂粒 灰黄褐色 普通	P50 10% PL10 西部覆土中層
17	甕 土師器	A (17.8) B (9.2)	体部から口縁部の破片。体部は内彎し、口縁部は上位で強く外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部上位外面縦位のヘラナデ。以下の体部外面ヘラナデ。内面ナデ。	長石・雲母・砂粒 にぶい黄褐色 普通	P51 10% 北コーナー一部覆土中層



第17回 第5号住居跡実測図



第18图 第5号住居跡出土遺物実測図(1)



第19図 第5号住居跡出土遺物実測図(2)

第6号住居跡 (第20・21・22・23・24図)

位置 調査区北部, C3b9区。

規模と平面形 長軸6.15m, 短軸6.06mの方形である。

主軸方向 N-41°-W

壁 壁高は64~77cmで, ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 西コーナー部を除き, 巡る。上幅8~15cm, 下幅4~10cm, 深さ3~8cmで, 断面形はU字状である。

床 貯蔵穴1の周囲は5cmほどの高まりがあるが, 他は平坦である。貯蔵穴1から支柱穴の内側にかけての部分が硬い。北東壁下の壁溝からP2につながる溝が1条ある。長さ150cm, 上幅12cm, 下幅7cm, 深さは9cmで, 断面形はU字状である。壁側から焼土が, 中央部から炭化材が検出された。

貯蔵穴 2か所。貯蔵穴1は, 南コーナー部に位置し, 径107cmの円形で, 深さは38cmである。底面は平坦である。貯蔵穴2は, 西コーナー部に位置し, 長径65cm, 短径53cmの楕円形で, 深さは45cmである。底面は皿状である。

貯蔵穴1土層解説

- 1 褐色 ローム小ブロック多量, 炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック多量, ローム中ブロック・炭化粒子少量
- 3 黒褐色 炭化物多量, ローム小ブロック中量, 焼土粒子少量

貯蔵穴2土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック中量, ローム中ブロック・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 焼土小ブロック中量, 焼土大ブロック・ローム小ブロック・炭化粒子少量

ピット 5か所 (P1~P5)。P1は径25cmの円形で, 深さは62cmである。P2は径21cmの円形で, 深さは52cmである。P3は径23cmの円形で, 深さは55cmである。P4は長径22cm, 短径19cmの楕円形で, 深さは57cmである。P1~P4は支柱穴である。P5は長径22cm, 短径19cmの楕円形で, 深さは25cmである。出入り口施設に伴うピット

トと思われる。

炉 北西壁寄りに位置し、長径80cm、短径67cmの楕円形で、床面を4cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉床は赤変硬化している。

覆土 6層に分層された。レンズ状の堆積状況から、自然堆積と考えられる。

土層解説

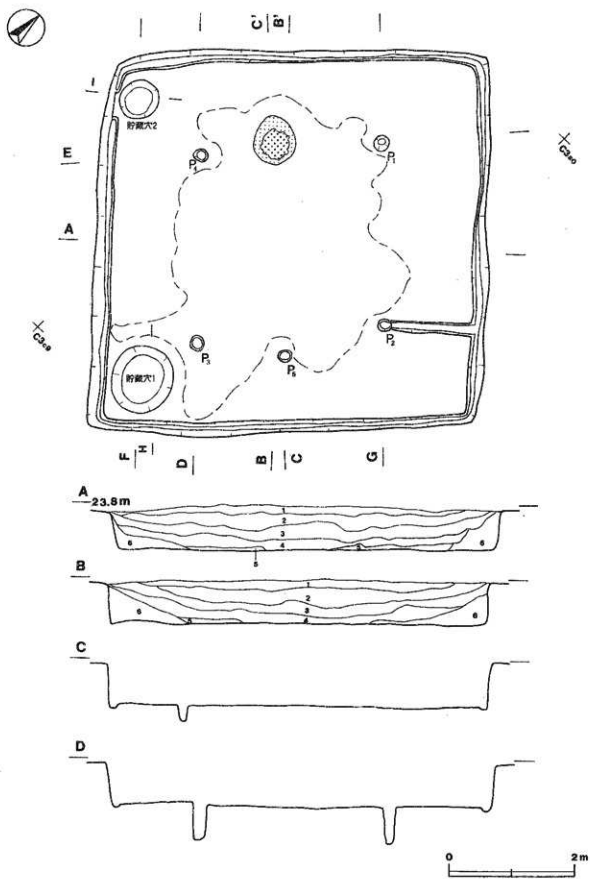
- 1 暗褐色 ローム小ブロック少量
- 2 黒褐色 ローム中・小ブロック少量、炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ローム中ブロック多量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 5 暗褐色 ローム小ブロック・焼土粒子少量、炭化物微量
- 6 暗褐色 焼土中・小ブロック少量

遺物 土師器片680点、土製品1点、石製品8点、ガラス製品3点が出土している。1・2は坏で、1は北壁側の覆土下層から、2は西コーナー部の覆土下層から出土している。3は碗で、中央部の覆土下層から出土している。4・5は埴で、4は南東壁側の覆土下層から、5は覆土中から出土している。6～9は壺で、6・7は南コーナー部の覆土下層から、8は西部の覆土下層から、9は南コーナー部の覆土中層から出土している。10～15は甕で、10は南コーナー部の、11は西コーナー部の、12・13は西部の覆土下層からそれぞれ出土している。14は南コーナー部の覆土下層から出土した破片と、貯蔵穴から出土した破片が接合したものである。15は南コーナー部の覆土上・下層から出土した破片と貯蔵穴から出土した破片が接合したものである。16は甕で、南コーナー部の覆土下層から出土している。17は球状土鉢で北コーナー部の覆土下層から出土している。18は石製模造品の剣形品で、南コーナー部の覆土下層から出土している。20～25は白玉である。20は南西壁側覆土下層から、21～25は東コーナー部の覆土下層から出土している。19は不明石器で、東壁側の覆土中層から出土している。26～28はガラス玉で、東コーナー部の覆土下層から出土している。

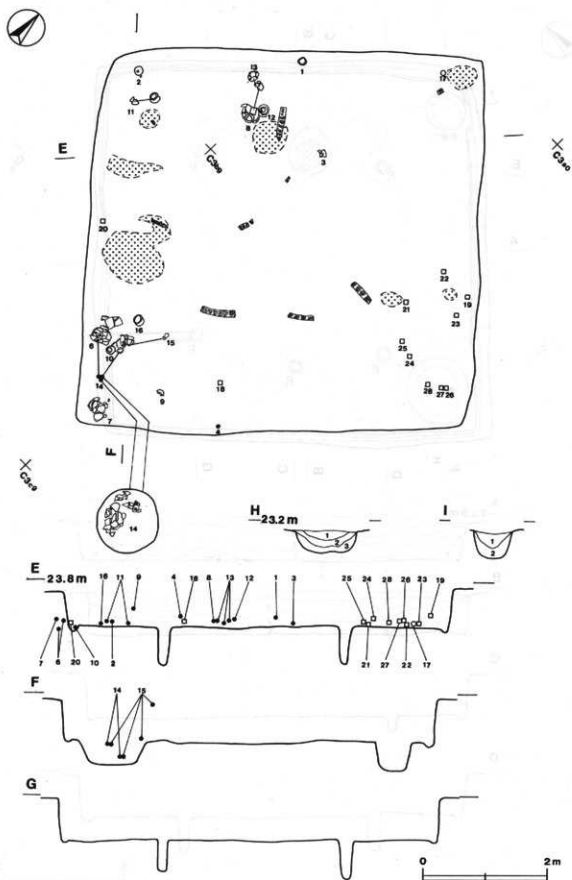
所見 本跡の時期は、出土土器から古墳時代中期（5世紀第2四半期頃）と考えられる。

第6号住居跡出土遺物観察表

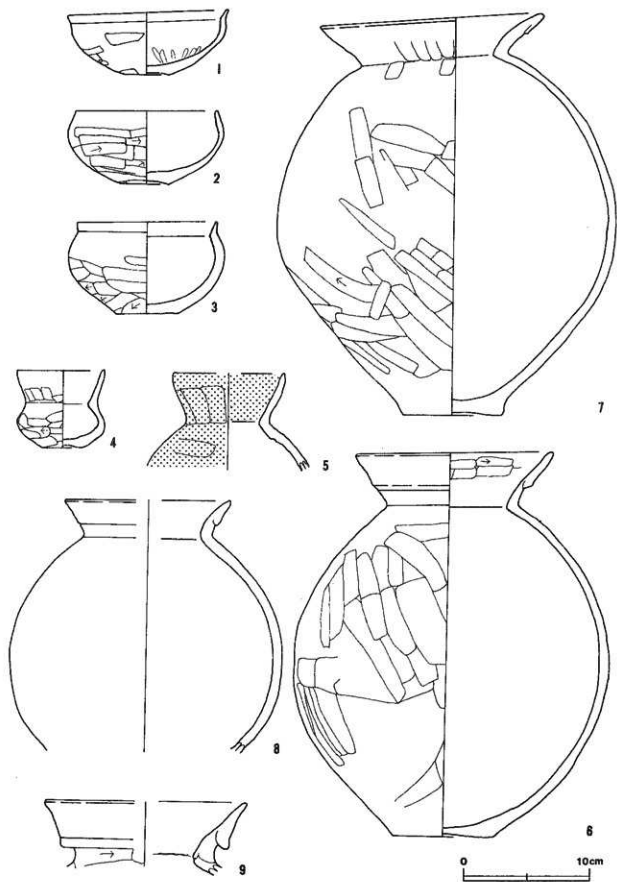
図版番号	器種	寸法(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第22図	1 土師器	A 12.7	上げ底。体部は上位で強く内彎し、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り、内面へラ磨き。	長石・石英・砂粒・赤色粒子	P52 95% PL11 北壁側覆土下層
		B 5.4			褐色	普通
		C 3.6				
2	土師器	A 11.2	上げ底。体部から口縁部にかけて、内彎しながら立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り、内面へラナデ。	雲母・砂粒・赤色粒子	P53 95% PL11 西コーナー部覆土下層
		B 5.9			明赤褐色	普通
		C 3.7				
3	碗	A 11.3	体部は内彎し、口縁部はわずかに外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り、内面へラナデ。	雲母・砂粒・赤色粒子	P54 70% PL11 中央部覆土下層
		B 7.4			にぶい褐色	普通
		C 4.9				
4	土師器	A 6.9	上げ底。体部は横に張り出し、口縁部は内彎気味に立ち上がる。	口縁部下位、縦位のへラナデ。体部外面へラ削り、内面ナデ。	雲母・砂粒・赤色粒子	P55 95% PL11 南東壁側覆土下層
		B 6.2			にぶい褐色	普通
		C 3.1				
5	土師器	A (8.8)	体部から口縁部の破片。口縁部は外傾して立ち上がり、上位で内彎する。肩部はつまみ上げられている。	口縁部縦位のへラナデ。体部外面へラナデ。口縁部内・外面、体部外面赤彩。	石英・砂粒 にぶい褐色	P56 30% PL11 覆土中
		B (7.9)				
6	土師器	A 15.6	底部はわずかに突出する。体部は中位に最大径を持つ。口縁部は折り返し口縁で、わずかに外反する。	口縁部外面横位のナデ。内面横位のへラナデ。体部外面へラ削り。	長石・雲母・砂粒・赤色粒子	P57 90% PL12 南コーナー部覆土下層
		B 31.0			明褐色	普通
		C 8.0				
7	壺	A 17.5	底部は突出する。体部は中位に最大径を持つ。口縁部はわずかに段を持ち、外傾して立ち上がる。	口縁部上位内・外面横ナデ。下位外面縦位のへラ削り。体部外面へラ削り。	長石・石英・雲母・砂粒	P58 90% PL12 南コーナー部覆土下層
		B 32.4			暗赤褐色	普通
		C 7.8				
8	壺	A (13.0)	体部から口縁部の破片。体部は中位に最大径を持つ。口縁部は折り返し口縁で、外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	雲母・砂粒	P59 30% PL11 北壁側覆土下層
		B (20.1)			明赤褐色	普通



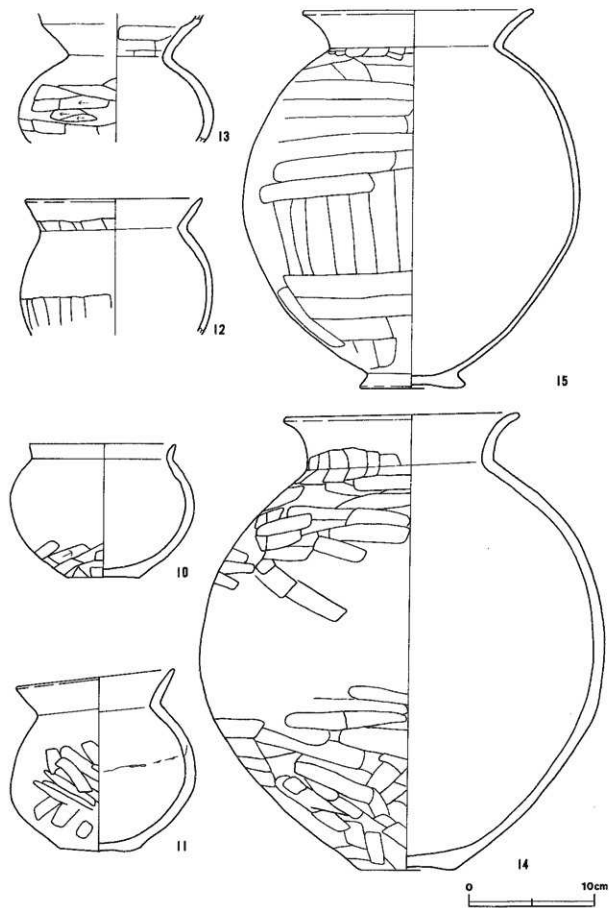
第20图 第6号住居跡実測图(1)



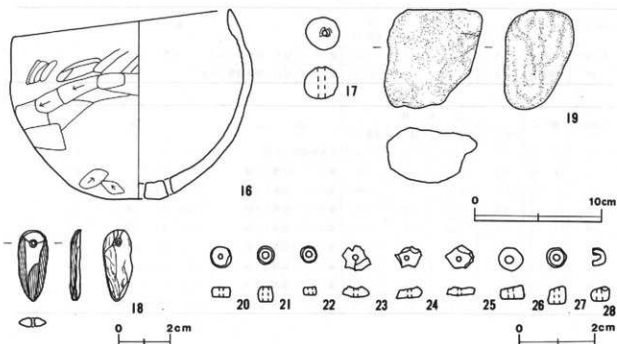
第21图 第6号住居跡実測图(2)



第22图 第6号住居跡出土遺物実測図(1)



第23图 第6号住居跡出土遺物実測図(2)



第24図 第6号住居跡出土遺物実測図(3)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第22図 9	土 師 器	A 16.0 B 5.2	口縁部の破片。頸部はほぼ垂直に立ち上がる。口縁部は折り返し口縁で、外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。頸部外面ヘラナデ。	雲母・砂粒 にふい黄褐色 普通	P60 5% PL11 南コーナー部覆土 中層
第23図 10	土 師 器	A 11.7 B 10.7 C 5.8	平底。体部は内彎し、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナデ。内面ナデ。	雲母・砂粒 褐色 普通	P61 95% PL11 南コーナー部覆土 下層
11	土 師 器	A 12.7 B 14.6 C 6.4	体部は内彎し、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナデ。体部内面に輪積み痕を残す。	長石・雲母・砂粒・ 赤色粒 にふい褐色 普通	P62 90% PL11 西コーナー部覆土 下層
12	土 師 器	A 14.0 B 10.9	体部は内彎し、口縁部は外傾する。	口縁部外面下位。縦位のヘラナデ。体部外面下位。縦位のヘラナデ。	砂粒・赤色粒 にふい褐色 普通	P63 50% PL11 西面覆土下層
13	土 師 器	B 10.4	体部から口縁部の破片。体部は内彎して立ち上がる。口縁部は外反して立ち上がり、下位に弱い稜をもつ。	口縁部内面ヘラナデ。体部外面横位のヘラナデ。内面ヘラナデ。	長石・石英・雲母・ 砂粒 明赤褐色 普通	P64 30% PL11 西面覆土下層
14	土 師 器	A 18.8 B 36.7 C 7.4	底部はわずかに突出する。体部は球形状で、口縁部は強く外反する。	口縁部内・外面横ナデ。下位縦位のヘラナデ。体部外面ヘラナデ。	長石・雲母・砂粒 にふい赤褐色 普通	P65 90% PL12 南コーナー部覆土 下層。貯蔵穴内
15	土 師 器	A 18.4 B 30.5 C 8.0	底部は横に突出する。体部は中位に最大径を持ち、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナデ。	砂粒 にふい褐色 普通	P66 90% PL12 南コーナー部覆土 上・下層。貯蔵穴内
第24図 16	土 師 器	A 17.2 B 15.0	底部の中央部に大孔が、外周部に小孔が穿たれている。体部から口縁部にかけて内彎して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナデ。内面ヘラナデ。	長石・石英・雲母・ 砂粒・赤色粒 にふい褐色 普通	P67 95% PL11 南コーナー部覆土 下層

図版番号	種別	計 測 値				出 土 地 点	備 考
		径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
第24図17	球状土師	2.6	2.6	0.6	14.0	北コーナー部覆土下層	DP4 PL12

図版番号	種別	計測値				石質	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(kg)		
第24図18	石製物品	2.8	1.2	0.4	(3.7)	滑石	Q6 剝離品 南コーナー部覆土下層 P.L12
19	不明石器	7.8	7.6	5.4	(83.0)	軽石	Q13 東壁倒置土中層 P.L12

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
20	白土	0.5	0.25	0.1	0.12	南内側倒置土下層	Q7 滑石 P.L12
21	白瓦	0.4	0.4	0.15	0.11	東コーナー部覆土下層	Q8 滑石 P.L12
22	白瓦	0.4	0.2	0.1	0.08	東コーナー部覆土下層	Q9 滑石 P.L12
23	白瓦	0.7	0.25	0.15	0.15	東コーナー部覆土下層	Q10 滑石 未製品 P.L12
24	白瓦	0.7	0.25	0.1	0.16	東コーナー部覆土下層	Q11 滑石 未製品 P.L12
25	白瓦	0.7	0.2	0.1	0.13	東コーナー部覆土下層	Q12 滑石 未製品 P.L12
26	ガラス瓦	0.65	0.4	0.2	0.19	東コーナー部覆土下層	Q26 ガラス P.L12
27	ガラス瓦	0.5	0.5	0.15	0.18	東コーナー部覆土下層	Q27 ガラス P.L12
28	ガラス瓦	0.5	0.4	0.15	0.08	東コーナー部覆土下層	Q28 ガラス 欠損 P.L12

表3 実教寺子西遺跡住居跡一覧表

住居番号	位置	主軸方向	平面形	規模(㎡) 長軸×短軸	壁高(cm)	床面	内部施設						出土遺物	備考		
							噴溝	溝	土柱	土室	土室	土室			土室	土室
1	C39	N-20°-W	方形	3.85×3.70	35-42	平壇	-	-	-	1	1	-	1	人為	土師器(筒・高坏・埴・壺・甕)	39ACD-2の中間層に所在
2	C36	N-34°-W	方形	7.17×6.35	34-55	平壇	2	2	4	1	4	1	1	人為	土師器(筒・高坏・埴・壺・甕)、埴土瓦、口土師器(高坏・高坏)	39ACD-2の中間層に所在
3	C41	N-42°-W	方形	6.70×6.67	16-30	平壇	-	-	4	1	3	-	1	人為	土師器(高坏・高坏・埴・壺・甕)、埴土瓦、口土師器(高坏・高坏)	39ACD-2の中間層に所在
4	C39	N-25°-E	方形	6.36×6.51	22-34	平壇	-	-	4	-	1	-	-	人為	土師器(筒・高坏・埴・壺・甕)	39ACD-2の中間層に所在
5	C36	N-77°-W	方形	3.59×3.32	48-62	平壇	-	-	-	1	3	-	1	人為	土師器(筒・高坏・埴・壺・甕)	39ACD-2の中間層に所在
6	C39	N-41°-W	方形	6.15×6.06	64-77	平壇	2	2	4	2	-	1	1	自然	土師器(筒・高坏・埴・壺・甕)、埴土瓦、口土師器(高坏・高坏)、白土、ガラス瓦	39ACD-2の中間層に所在

2 井戸跡

井戸跡1基が検出された。

第1号井戸跡(第25図)

位置 調査区南西部、E2g0区。

規模と形状 長径2.46m、短径1.81mの楕円形で、深さは(2.83)mである。全体形状は漏斗形を呈しており、上半は逆円錐形、深さ1.10mより下は径0.78mの円筒形である。底面の形状は、途中で掘りこみを中止したため、不明である。

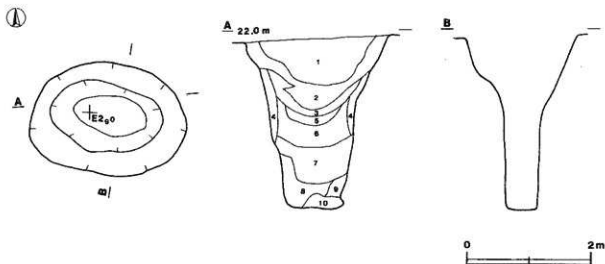
長径方向 N-78°-E

覆土 10層に分層された。ロームブロックを含み、人為堆積と考えられる。

土層解説

1	褐色	色	ローム小ブロック・粒子中量、埴土粒子・炭化粒子微量
2	褐色	色	ローム粒子多量、ローム中ブロック少量、炭化粒子微量
3	褐色	色	ローム粒子多量、ローム小ブロック少量
4	褐色	色	ローム粒子多量
5	褐色	色	ローム小ブロック・粒子中量、炭化粒子微量
6	褐色	色	ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、炭化粒子少量
7	褐色	色	ローム小ブロック・粒子中量、炭化粒子少量
8	褐色	色	ローム小ブロック中量、ローム粒子少量
9	オリーブ褐色	色	粘土粒子多量、ローム粒子微量
10	オリーブ褐色	色	粘土粒子多量、炭化粒子・ローム粒子少量

所見 遺物が出土しなかったため、本跡の時期は不明である。



第25図 第1号井戸跡実測図

3 土坑

上坑35基が検出された。時期が分かる土坑については以下で解説し、それ以外の土坑については、一覧表で記載する。

第33号土坑 (第26図)

位置 調査区西部, C 2 h9区。

規模と平面形 長径1.75m, 短径1.53mの楕円形で、深さは38cmである。

長径方向 N-78°-W

壁 外傾して立ち上がる。

底面 皿状である。

覆土 4層に分層された。ロームブロックを含み、人為堆積と考えられる。

土層解説

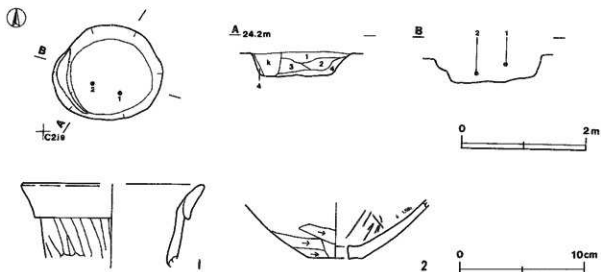
- 1 黒褐色 ローム中ブロック・粒子少量, 焼土粒子微量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量
- 4 褐色 ローム中ブロック中量

遺物 土師器片44点が出土している。1は壺の口縁部片で、覆土中層から出土している。2は甑の底部片で、覆土中層から出土している。

所見 本跡の時期は、出土土器から古墳時代中期と考えられる。性格は不明である。

第33号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	寸法(m)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第26図 1	壺	A [14.4]	口縁部の破片。頸部はほぼ垂直に立ち上がる。口縁部は折り返し口縁で、外反する。	口縁部内・外面横ナデ。頸部外面斜位のヘラナデ、内面ナデ。	長石・雲母・砂粒 灰黄褐色 普通	P71 5% PL13 覆土中層
	土師器	B (6.6)				
2	甑	B (4.7)	底部片。穿孔式。体部はわずかに内傾して立ち上がる。	体部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ。	雲母・砂粒 灰い褐色 普通	P72 10% PL13 覆土中層
	土師器	C 4.2				



第26図 第33号土坑・出土遺物実測図

第35号土坑 (第27図)

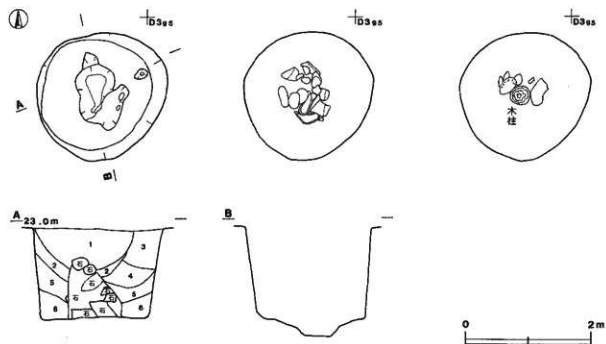
位置 調査区西部, D 3g4区。

規模と平面形 径2.08mの円形で、深さは1.70mである。

長径方向 N-81°-W

壁 垂直に立ち上がる。

底面 凹凸である。



第27図 第35号土坑実測図

覆土 6層に分層された。人為堆積で、中央部の木柱の周囲に礫が積まれた後に、ロームブロックを含む土で埋め戻されたものと考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量、炭化粒子少量
 2 暗褐色 ローム粒子多量、ローム中ブロック中量、ローム小ブロック少量、炭化粒子少量
 3 暗褐色 ローム小ブロック・粒子多量、ローム中ブロック中量、黒色土大ブロック・ローム大ブロック極少量
 4 褐色 ローム小ブロック・粒子多量、ローム中ブロック・黒色土中ブロック・黒色土粒子中量
 5 褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・黒色土粒子中量、ローム粒子・黒色土中ブロック少量
 6 褐色 ローム小ブロック・粒子多量、黒色土粒子中量、ローム中ブロック・黒色土小ブロック少量

遺物 中央部で木柱が検出され、その周囲に、径10～20cmの礎23点が円錐状に積まれていた。

所見 本跡は、第3号軍事施設跡の北西18mに位置し、木柱が完全に腐朽せずに残存していたことから、電柱跡の可能性がある。

表4 実教寺子西遺跡十坑一覽表

土坑番号	位置	長短方向 (長軸方向)	平面形	規模		断面	底面	層土	出土遺物	備考
				長さ×短さ(m)	深さ(cm)					
1	E 3 17	N-44°-W	楕円形	1.45 × 1.18	13	緩斜	平坦	人為	炭化物	
2	E 3 19	N-73°-E	楕円形	3.74 × 1.53	30	緩斜	凹状	人為		
3	E 3 18	N-30°-E	楕円形	1.92 × 0.87	33	外傾	凹状	人為	土師器	
4	E 3 16	N-25°-E	楕円形	2.32 × 1.17	27	緩斜	平坦	人為		
5	E 3 14	N-69°-E	楕円形	1.86 × 1.23	60	外傾	平坦	人為	土師器	
6	E 3 15	N-0°	楕円形	2.75 × 1.00	44	外傾	平坦	人為	土師器	
7	E 3 14	N-45°-E	楕円形	2.82 × 1.17	36	外傾	平坦	人為	土師器	
8	E 3 11	N-26°-W	(楕円形)	1.96 × 1.13	46	緩斜	平坦	人為		SK-9と重複
9	F 3 41	N-74°-E	(不定形)	1.63 × (1.20)	43	緩斜	平坦	人為	土師器	SK-8と重複
10	E 3 11	N-74°-E	楕円形	2.47 × 1.48	21	外傾	平坦	人為		
11	E 2 10		円形	1.30 × 1.46	30	緩斜	凹状	人為	縄文土器	
12	E 2 11	N-70°-W	楕円形	1.17 × 1.03	40	緩斜	凹凸	人為		
14	E 3 11	N-18°-W	楕円形	2.02 × 1.45	90	緩斜	凹状	人為		
15	D 2 15	N-26°-W	楕円形	1.54 × 1.08	25	緩斜	凹状	人為		
16	E 1 16	N-24°-W	楕円形	1.33 × 0.93	24	緩斜	凹状	人為		
20	C 3 16	N-19°-W	楕円形	1.30 × 0.76	74	外傾	凹凸	人為	土師器	
21	C 2 10	N-12°-E	楕円形	3.32 × 2.10	30	緩斜	平坦	人為	土師器	
22	B 3 13	N-13°-E	楕円形	1.34 × 1.15	19	外傾	凹状	人為	土師器	
23	R 3 14	N-69°-W	楕円形	1.23 × 0.86	25	緩斜	凹状	人為	土師器	
24	D 3 12	N-42°-E	楕円形	2.60 × 1.34	80	緩斜	凹状	人為	縄文土器・土師器	
25	D 3 13	N-31°-W	楕円形	1.20 × 1.00	29	緩斜	凹状	人為		
26	D 2 19	N-24°-E	楕円形	1.19 × 0.93	19	緩斜	凹状	人為	土師器	
27	D 3 18	N-23°-E	楕円形	1.64 × 1.38	40	外傾	凹凸	人為		
28	D 3 19	N-40°-E	楕円形	1.33 × 1.37	41	外傾	凹凸	人為		
29	D 4 13		円形	1.20 × 1.64	115	緩斜	凹凸	人為		
30	E 4 13	N-87°-W	不定形	5.08 × 2.11	28	緩斜	凹凸	人為		
31	E 4 12	N-4°-W	楕円形	1.83 × 1.61	43	緩斜	凹凸	人為		
32	E 4 13	N-40°-E	楕円形	3.30 × 1.91	90	外傾	凹状	人為	土師器	
33	C 2 10	N-78°-E	楕円形	1.75 × 1.33	38	外傾	凹状	人為	土師器(帯・甑)	古墳時代中期
34	D 6 15	N-45°-E	楕円形	1.37 × 1.35	25	緩斜	平坦	人為		
35	D 3 14		円形	2.08 × 1.91	1.70	垂直	凹凸	人為	礎・木柱	電柱跡

4 軍事施設跡

5基の軍事施設跡が確認された。出土遺物や現地での聞き取り調査などから、いずれも第二次世界大戦時の遺構であることが判明している。以下、遺構の形態などについて記載する。

第1号軍事施設跡(第28・29図)

位置 調査区北部、C4b3区。

規模と形状 砲台部と弾薬庫、それを囲む掩体からなる。掩体外側での規模、形状は、長軸21.5m、短軸19.1mの楕円形である。

掩体 上幅0.82~2.00m、下幅5.00~9.08mで、高さは1.92mである。断面形は台形状である。砲台部と弾薬庫を囲んで盛土により構築されている。掩体の東側に、盛土を掘りこんで入り口が設けられている。

覆土 31層に分層された。1層から25層はロームブロックを多量に含み、廃棄後埋められた人為堆積と考えられる。26層から31層は掩体盛土である。

土層解説

1 褐色	ローム小ブロック・粒子少量、炭化粒子極微量	17 褐色	ローム粒子少量
2 灰褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、小礫極微量	18 灰褐色	ローム粒子少量、炭化粒子極微量
3 褐色	ローム粒子中量、小礫極微量	19 暗褐色	ローム小ブロック・粒子少量
4 暗褐色	ローム粒子・小礫極微量	20 黒褐色	ローム粒子・炭化粒子少量
5 暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・小礫少量、炭化粒子極微量	21 黒褐色	ローム粒子・小礫少量
6 褐色	ローム粒子中量	22 褐色	ローム粒子少量、ローム小ブロック・炭化粒子極微量
7 褐色	ローム小ブロック・粒子極微量	23 暗褐色	ローム小ブロック・粒子少量
8 褐色	ローム粒子中量、炭化粒子極微量	24 褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量
9 暗褐色	ローム粒子・炭化粒子少量	25 暗褐色	ローム粒子・炭化粒子少量
10 暗褐色	ローム粒子・小礫極微量	26 褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
11 灰褐色	ローム小ブロック・粒子少量	27 褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、炭化粒子極微量
12 暗褐色	ローム粒子少量、ローム小ブロック極微量	28 暗褐色	ローム小ブロック・粒子少量
13 暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・小礫少量	29 暗褐色	ローム小ブロック・粒子少量、炭化粒子・小礫極微量
14 暗褐色	ローム粒子・小礫少量	30 暗褐色	ローム粒子少量、ローム小ブロック極微量
15 暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子極微量	31 暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子・小礫極微量
16 暗褐色	ローム粒子少量、ローム小ブロック極微量		

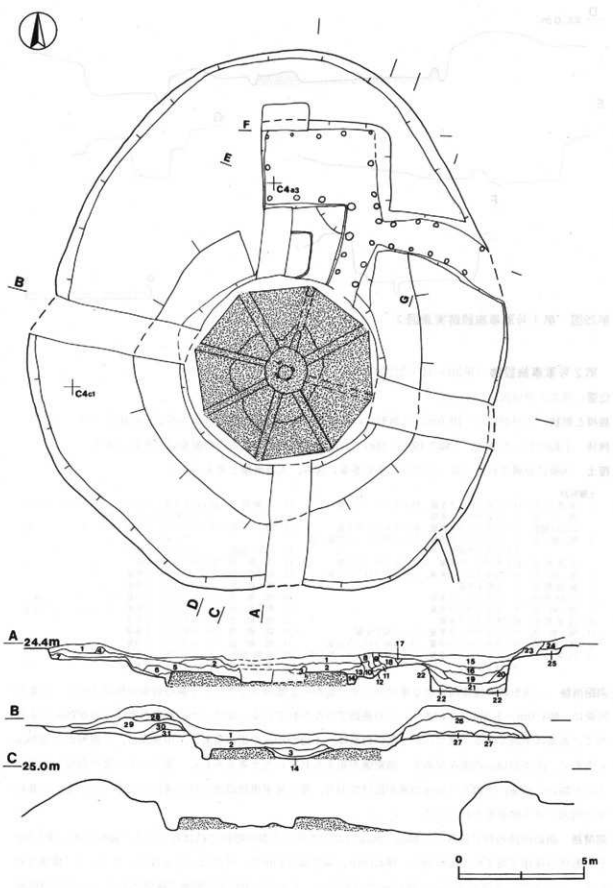
砲台部 砲台部は径4.23mの円形で、砲床は一辺2.50mの正八角形のコンクリート製である。中央部からコーナーへ放射状に延びる幅15~40cm、深さ40cmの溝が7条確認された。溝中にはボルトが通された木製の角材が埋め込まれていた。

弾薬庫 砲台部の北に位置し、砲台部と半地下式の通路でむすばれている。縦5.15m、横3.50mの長方形の上坑で、深さは1.90mである。

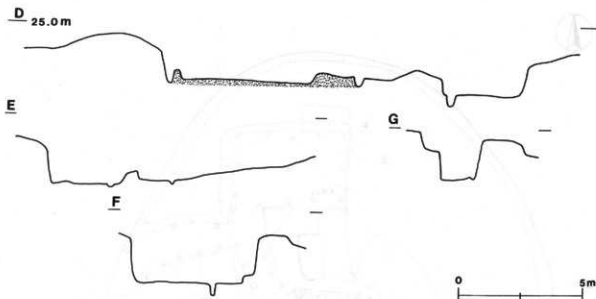
通路 通路は、東部の入り口から西方に下り勾配で向かい、砲台部と弾薬庫につながっている。上幅1.58~2.00m、下幅0.98~1.40m、深さは0.54~1.45mである。壁に沿って、径12~32cmの円形ビットが0.28~1.88mの間隔で確認された。

遺物 鉄製部品3点、合金製部品1点が出土している。

所見 本跡は、掩体内に高角砲の砲床が残っており、本跡の南東側25mに位置する防空指揮所跡と第4号溝で結ばれていることから、高角砲台跡と考えられる。



第28图 第1号军事设施踏迹实测图(1)



第29図 第1号軍事施設跡実測図(2)

第2号軍事施設跡 (第30・31・32図)

位置 調査区中央部，D4c6区。

規模と形状 1辺が17.0～19.0mの三角形の掩体と，縦10.5m，横12.7mの不定形の掩体とから成る。

掩体 上幅0.43～2.09m，下幅2.49～7.28mで，高さは1.66mである。断面形は台形状である。

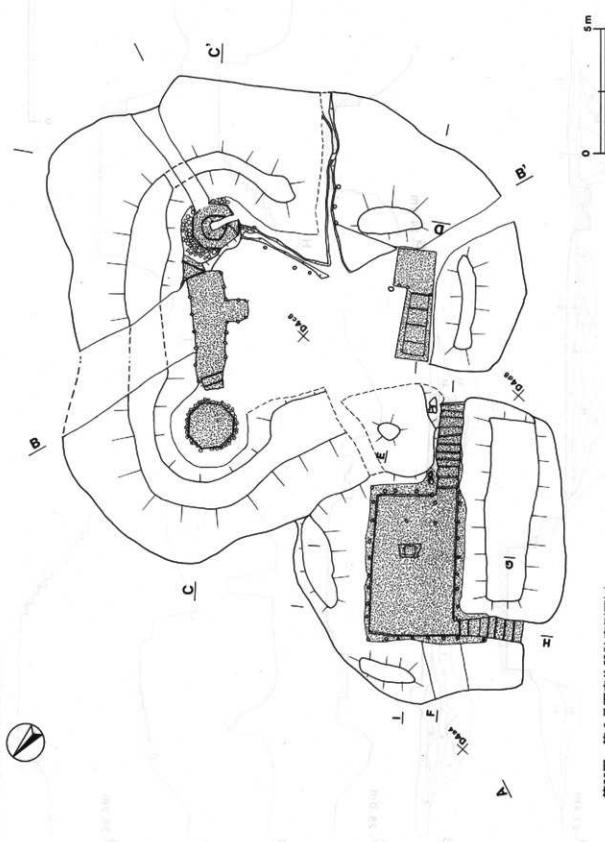
覆土 26層に分層された。ロームブロックを多量に含み，人為堆積と考えられる。

土層解説

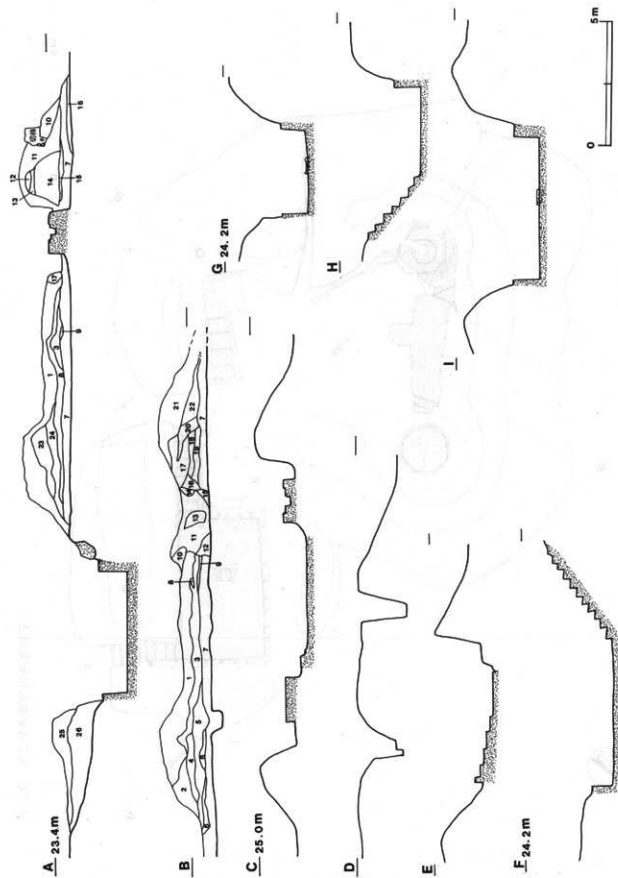
1 浅黄棕色	ローム中ブロック多量，粘土小ブロック中量	14 浅黄棕色	粘土粒子多量，ローム小ブロック中量，ローム中ブロック・粘土中ブロック少量
2 明褐色	ローム小ブロック多量	15 暗褐色	ローム中ブロック中量，ローム大ブロック・粘土中ブロック少量
3 におい褐色	ローム小ブロック多量，粘土小ブロック少量	16 におい褐色	ローム小ブロック多量
4 明褐色	ローム小ブロック多量，ローム中ブロック中量，粘土大ブロック少量	17 浅黄色	粘土大ブロック多量
5 浅黄棕色	粘土大ブロック多量，ローム小ブロック中量	18 明褐色	ローム小ブロック多量
6 暗褐色	ローム小ブロック多量，ローム中ブロック中量	19 明褐色	ローム中ブロック多量
7 暗褐色	ローム粒子多量	20 明褐色	ローム小ブロック中量，粘土中ブロック少量
8 におい褐色	ローム中ブロック多量	21 明褐色	ローム中ブロック多量，ローム大ブロック中量
9 明褐色	ローム小ブロック多量	22 明褐色	ローム大ブロック多量
10 浅黄棕色	粘土大ブロック多量	23 暗褐色	ローム大ブロック多量
11 明褐色	ローム小ブロック多量，ローム粒子少量	24 明褐色	ローム大ブロック中量
12 暗褐色	ローム小ブロック中量，ローム中ブロック少量	25 麻暗褐色	ローム小ブロック多量
13 浅黄棕色	ローム小ブロック多量，ローム中ブロック・粘土中ブロック少量	26 明褐色	ローム大ブロック多量

測距所跡 三角形の掩体内の北と東のコーナー部から2基のコンクリート製の台座が検出された。2基の台座間は，幅1.0m～1.5mのコンクリートの通路でつながれている。北コーナー部の台座は1辺が70cmの正八角形で，表面は平坦である。東コーナー部の台座は，1辺が70cmの正八角形で，中央部に，平面形が1辺30cmの正方形で，深さが18cmの窪みがある。測距儀が据えられていたと考えられる。東コーナー部の台座からは，東方に上幅10～30cm，下幅5～10cmの溝が延びており，第5号軍事施設跡と結ぶ溝につながっている。2基の台座の周囲には小礫が敷かれている。

部屋跡 測距所跡の西に位置し，幅65～90cmのコンクリート製の階段で結ばれている。縦11.0m，横7.5mの長方形の掩体で囲まれ，縦6.38m，横4.00m，深さは2.45mで，厚さ12～40cmのコンクリートで構築されている。コンクリート壁の上部に，径10cmの円形のピットが25～100cmの間隔で確認された。中央部の底面に，縦90cm，横50cmで，高さが8cmのコンクリートの高まりがある。測距所跡の西部から部屋跡の南東部にかけて，



第30图 第2号军事设施勘察图(1)



第31图 第2号草场设施测量图(2)

径10cmの管が、コンクリート製の階段に沿って、設置されている。

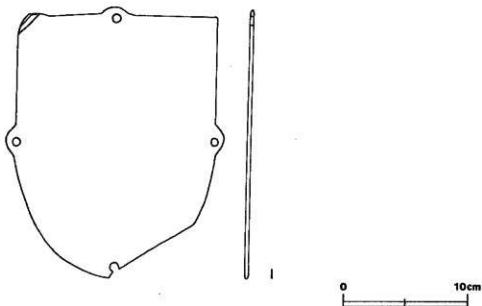
溝 本跡を基点として、放射状に延びる4条の溝が確認された。いずれも上幅0.53～0.82m、下幅0.24～0.38mで、深さは21～28cmであり、断面形は台形状である。第3号溝は、本跡の南部から第3号軍事施設跡まで延びている。長さは25.0mである。第4号溝は、本跡の北部から第1号軍事施設跡まで延びている。長さは27.0mである。第5号溝は、本跡の南東部から南東方向に向かい直線的に延びている。長さは13.5m確認できる。第6号溝は、本跡の東部から第5号軍事施設跡に向かい直線的に延びている。長さは14.5m確認できる。いずれの溝跡も、本跡から各施設への連絡用のケーブルを埋設した跡と考えられる。

遺物 金属部品1点が出土している。1は不明金属部品である。測距所跡の覆土中から出土している。

所見 本跡から、コンクリートで構築された部屋跡と測距儀等を設置したと考えられるコンクリート製の台座が2基確認された。本跡は、軍事施設跡群の中央部に位置し、本跡から、導線が埋設されていたと考えられる溝が高角砲台跡と電波探信儀施設跡等に向かって放射状に延びていることなどから、各施設に連絡を送る防空指揮所跡と考えられる。部屋跡は、指令室跡と考えられる。

第2号軍事施設跡出土遺物観察表

図録番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(mm)	重量(g)		
第32図1	不明鉄製品	21.6	17.5	0.3	(610)	指令室跡覆土中	M8 P.L.13



第32図 第2号軍事施設跡出土遺物実測図

第3号軍事施設跡（第33図）

位置 調査区南部，D3i0区。

規模と形状 径14.6m，深さ1.25～2.04mの円筒形に掘りこまれている。

ピット 径が10～80cmで，深さが16～100cmの円形または楕円形のピットが方形状に規則的な配置で並んでいる。

壁 ほぼ垂直に立ち上がる。南西部に，中央部に向かう出入り口施設と思われる，土で造られた幅55～90cmの階段がある。

覆土 27層に分層された。ロームブロックを多量に含み，人為堆積と考えられる。廃棄後，埋め戻されたものと推定される。

土層解説

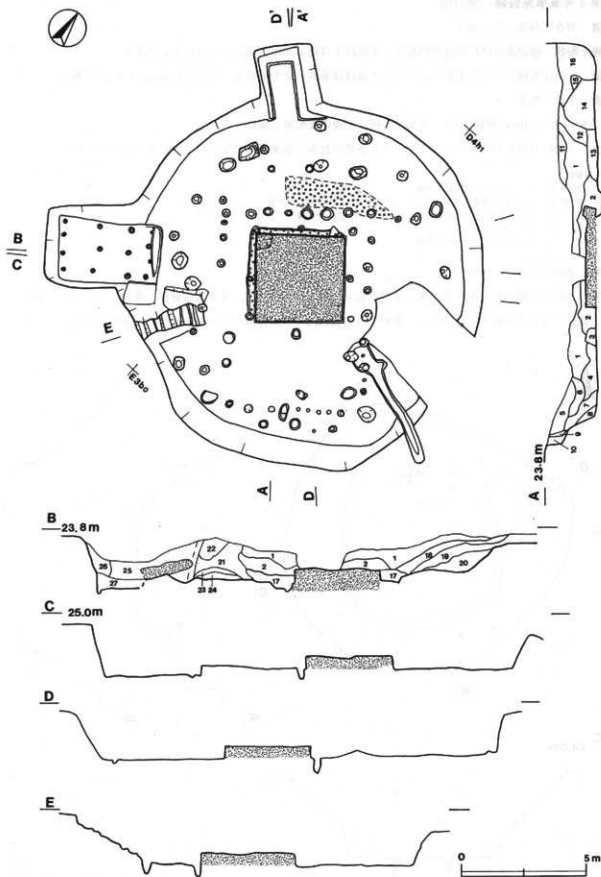
- 1 暗褐色 ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，ローム大ブロック・ローム中ブロック・炭化小ブロック・小礫少量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・粒子多量，炭化小ブロック少量，ローム大ブロック・ローム中ブロック・小礫微量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック・粒子多量，ローム中ブロック中量，粘土中ブロック少量，ローム大ブロック・小礫微量
- 4 暗褐色 ローム粒子多量，ローム中ブロック・ローム小ブロック・炭化粒子・石少量，ローム大ブロック微量
- 5 暗褐色 ローム中ブロック・小ブロック・粒子多量，炭化粒子微量
- 6 暗褐色 ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，ローム中ブロック少量，炭化粒子微量
- 7 暗褐色 ローム小ブロック・粒子中量，ローム中ブロック少量，炭化粒子微量
- 8 暗褐色 ローム中ブロック・粒子中量，ローム小ブロック少量
- 9 褐色 ローム粒子少量，ローム大ブロック微量
- 10 褐色 ローム小ブロック中量
- 11 暗褐色 ローム小ブロック・粒子多量
- 12 暗褐色 ローム小ブロック・粒子多量，ローム大・中ブロック中量
- 13 暗褐色 ローム大ブロック・中ブロック・小ブロック・粒子少量，炭化粒子微量
- 14 暗褐色 ローム中ブロック・小ブロック・粒子多量，ローム大ブロック・炭化粒子微量
- 15 褐色 ローム大・中ブロック多量
- 16 暗褐色 ローム小ブロック・粒子多量，ローム中ブロック中量
- 17 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・小礫少量，ローム中ブロック微量
- 18 褐色 ローム粒子中量，粘土大・中・小ブロック少量
- 19 暗褐色 ローム中ブロック・小ブロック・粒子中量
- 20 褐色 ローム粒子多量，ローム中・小ブロック中量
- 21 褐色 ローム小ブロック・粒子多量
- 22 褐色 ローム粒子中量，ローム大・小ブロック少量
- 23 暗褐色 ローム小ブロック多量，ローム粒子中量
- 24 暗褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
- 25 暗褐色 ローム小ブロック・粒子多量，ローム大ブロック微量
- 26 暗褐色 ローム粒子少量
- 27 暗褐色 ローム粒子少量，ローム中ブロック微量

台座 平面形は1辺が約3.4mの正方形である。コンクリート製である。上面は平坦で，機械を固定したと思われる鉄杭が7か所，垂直に埋め込まれていた。台座の周囲に小礫が敷かれている。

部屋跡 南西部に位置し，平面形は縦4.0m，横2.5mの長方形である。床面からアース線が出土している。発動機あるいは発電機が設置された部屋と考えられる。

遺物 鉄製部品76点，プラスチック部品，ガラス片，ビニールコード，両面に赤と黄の色が塗られている布，ワイヤー，電球の破片が出土している。

所見 本跡は，中央部に頑丈なコンクリート製の台座が1基残っていることから，電波探信儀（レーダー）施設跡と考えられる。



第33图 第3号军事设施遗迹实测图

第4号軍事施設跡（第34図）

位置 調査区西部，D3d6区。

規模と形状 確認面は径4.70mの円形で，中位以下は縦3.20m，横2.50mの長方形である。

壁面 上位は外傾して立ち上がり，中位以下はほぼ垂直に立ち上がる。高さは1.30m～1.45mである。

底面 平坦である。

ピット 径5～10cmの円形のピットが8か所，不規則な配置で確認された。

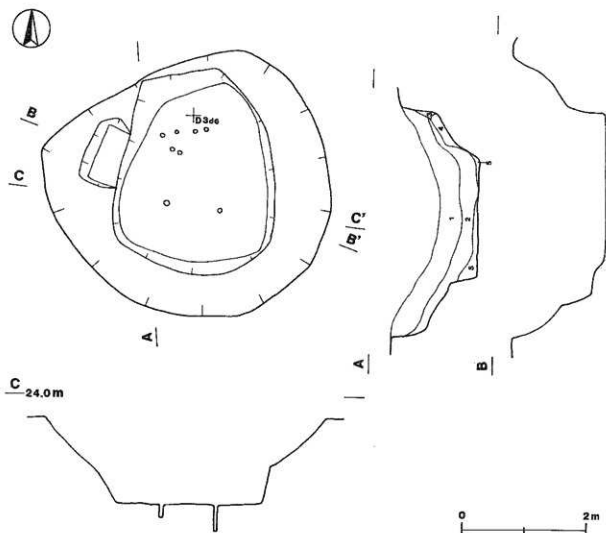
覆土 5層に分層された。ロームブロックを多量に含み，廃棄後埋め戻された人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，ローム中ブロック少量
- 3 褐色 ローム小ブロック・粒子多量，ローム大・中ブロック少量
- 4 褐色 ローム粒子中量
- 5 褐色 ローム小ブロック・粒子多量

遺物 遺物は出土していない。

所見 本跡は，確認時，中央部が窪んでおり完全に埋まっておらず，軍事施設跡群と隣接していることから，防空砲台に伴う施設跡と考えられる。規模と防空砲台内の設置位置から避難斬撃跡の可能性はある。



第34図 第4号軍事施設跡実測図

第5号軍事施設跡 (第35・36・37図)

位置 調査区東部，D6a1区。

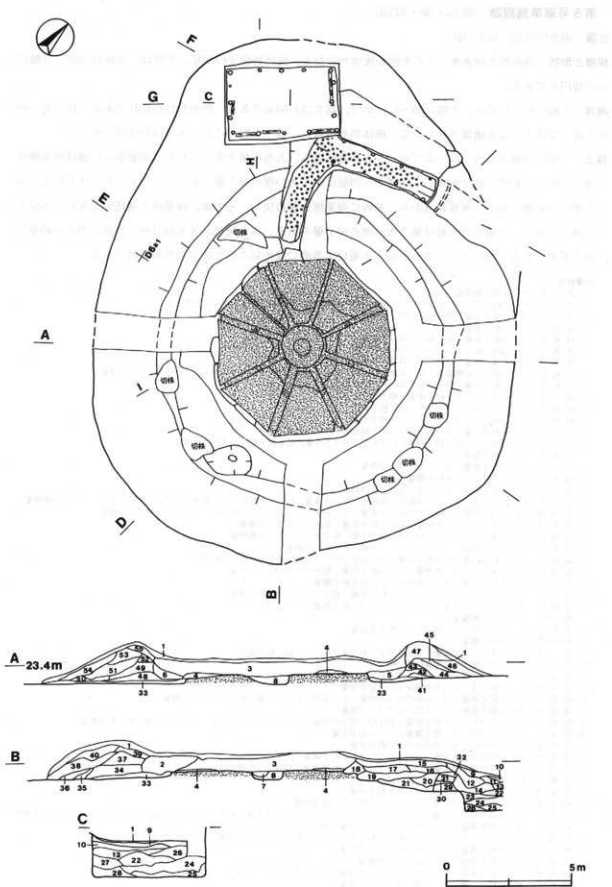
規模と形状 砲台部と弾薬庫，それを囲む掩体からなる。掩体外側の規模，形状は，長軸21.0m，短軸17.0mの楕円形である。

掩体 上幅0.20～1.02m，下幅1.20～6.50mで，高さは1.68mである。断面形は台形状である。砲台部と弾薬庫を囲んで盛土により構築されている。掩体の北東側に，盛土を掘りこんで入り口が設けられている。

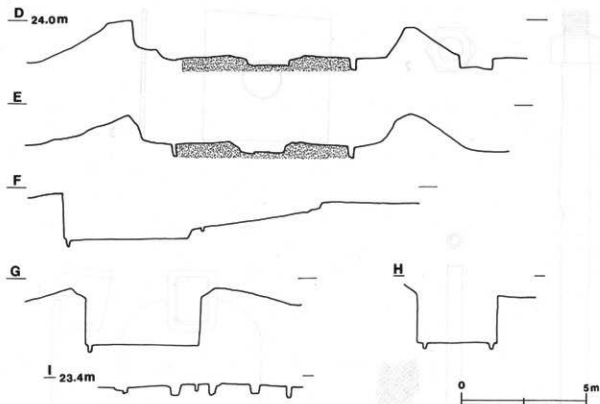
覆土 55層に分層された。ロームブロックを多量に含み，人為堆積と考えられる。30層から55層は掩体構築時の盛土であり，粘性，締りが強い。10層から29層は第1次の埋め戻し層であり，ロームブロックと粘土ブロックを多く含む層である。堆積状況から，初めに弾薬庫を埋め戻し，その後，弾薬庫と通路が交互に埋め戻されたと考えられる。2層から9層は第2次の埋め戻し層である。高角砲部品等を取り外した後に再度埋め戻された層と推測される。締りがなく柔らかい。1層は人為的に埋め戻された後の自然堆積層である。

土層解部

- 1 黒褐色 ローム粒子極微量
- 2 黒褐色 ローム中ブロック・小ブロック・粒子中量，粘土粒子少量，粘土中・小ブロック微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量
- 5 暗褐色 ローム中ブロック，ローム小ブロック微量
- 6 黒褐色 ローム中ブロック・小ブロック・粒子中量，粘土粒子少量，粘土中・小ブロック微量
- 7 黒褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
- 8 黒褐色 ローム粒子・小塊少量，ローム中ブロック・ローム小ブロック・粘土中ブロック・粘土小ブロック微量
- 9 暗褐色 ローム粒子少量，ローム小ブロック・粘土小ブロック微量
- 10 暗褐色 ローム小ブロック・粒子中量，粘土粒子極微量
- 11 暗褐色 ローム中ブロック・小ブロック・粒子少量
- 12 暗褐色 ローム中ブロック・小ブロック・粒子中量
- 13 暗褐色 ローム粒子少量，ローム中ブロック・粘土中ブロック微量
- 14 黒褐色 ローム小ブロック・粒子中量，ローム中ブロック少量，粘土大・中・小ブロック微量
- 15 暗褐色 ローム粒子少量
- 16 暗褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック微量
- 17 暗褐色 ローム小ブロック・粒子微量
- 18 暗褐色 ローム粒子中量，ローム中・小ブロック微量
- 19 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・黒色土ブロック少量，ローム中ブロック・粘土中ブロック・粘土小ブロック・小塊微量
- 20 暗褐色 ローム粒子中量，ローム大ブロック少量，ローム中ブロック・ローム小ブロック・粘土小ブロック微量
- 21 暗褐色 ローム中・小ブロック中量，ローム粒子少量，黒色土小ブロック微量
- 22 暗褐色 ローム中ブロック・小ブロック・粒子少量，粘土中・小ブロック極微量
- 23 黒褐色 ローム粒子少量，ローム小ブロック・粘土小ブロック微量
- 24 暗褐色 ローム粒子中量，粘土粒子少量，ローム小ブロック微量，粘土小ブロック極微量
- 25 暗褐色 ローム中・小ブロック多量，ローム粒子中量，粘土中・小ブロック少量
- 26 黒褐色 ローム粒子少量，ローム小ブロック・粘土粒子微量
- 27 暗褐色 ローム中ブロック・小ブロック・粒子少量，粘土小ブロック・粒子微量
- 28 暗褐色 粘土小ブロック少量，ローム小ブロック・粒子微量
- 29 暗褐色 ローム粒子極微量
- 30 暗褐色 ローム中ブロック微量，ローム粒子極微量
- 31 暗褐色 ローム粒子微量
- 32 暗褐色 ローム大ブロック多量，ローム粒子・粘土小ブロック・粘土粒子微量
- 33 暗褐色 ローム粒子微量，小塊極微量
- 34 暗褐色 ローム粒子中量，ローム中・小ブロック少量
- 35 暗褐色 ローム中・小ブロック中量，ローム粒子少量
- 36 暗褐色 ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，ローム大ブロック少量，粘土小ブロック微量
- 37 暗褐色 ローム粒子少量，ローム中・小ブロック微量
- 38 暗褐色 ローム小ブロック・粒子中量，粘土小ブロック少量，ローム大ブロック・ローム中ブロック・粘土上ブロック微量
- 39 暗褐色 ローム大ブロック・粒子微量，ローム粒子少量
- 40 暗褐色 ローム中ブロック・小ブロック・粒子少量
- 41 黒褐色 ローム中ブロック少量，ローム小ブロック・粒子微量
- 42 暗褐色 ローム中ブロック少量，ローム小ブロック・粒子微量，4層より色調が暗い。
- 43 暗褐色 ローム中ブロック中量，ローム小ブロック・粒子少量
- 44 暗褐色 ローム中ブロック・小ブロック・粒子中量
- 45 暗褐色 ローム大ブロック・中ブロック・小ブロック・粒子中量
- 46 暗褐色 ローム小ブロック中量，ローム大ブロック・中ブロック・粒子少量，粘土大ブロック・中ブロック・小ブロック・粒子微量
- 47 暗褐色 ローム粒子多量，ローム中・小ブロック中量，粘土大・中・小ブロック少量
- 48 暗褐色 粘土大ブロック中量，ローム粒子・粘土中ブロック・粘土小ブロック少量
- 49 暗褐色 ローム粒子多量，ローム中・小ブロック少量
- 50 暗褐色 ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
- 51 暗褐色 ローム粒子多量，ローム中・小ブロック中量，ローム大ブロック少量
- 52 暗褐色 ローム粒子少量，ローム中・小ブロック微量
- 53 暗褐色 ローム粒子多量，ローム中・小ブロック中量
- 54 暗褐色 ローム粒子多量，ローム小ブロック中量
- 55 暗褐色 ローム中ブロック・小ブロック・粒子多量



第35图 第5号军事设施跡実測图(1)



第36図 第5号軍事施設跡実測図(2)

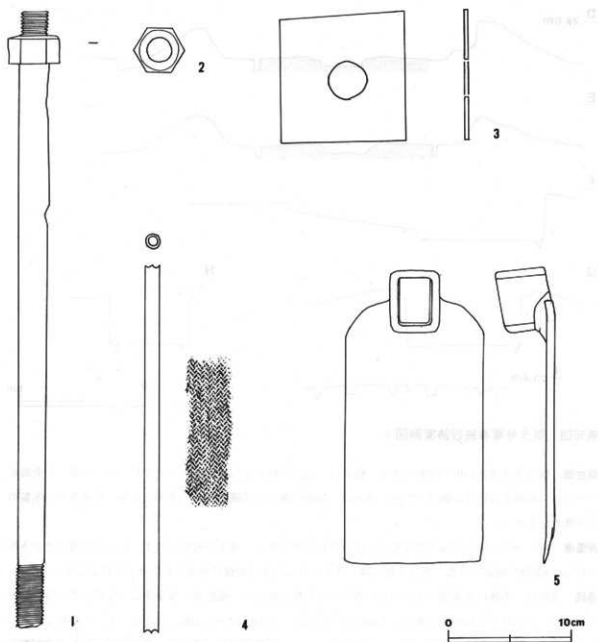
砲台部 砲台部は径9.10mの円形である。砲床は一辺2.50mの正八角形のコンクリート製である。中央部からコーナーに放射状に延びる幅15～40cm、深さ27～40cmの溝が8条確認され、溝中にボルトが通された木製の角材が埋め込まれていた。

弾薬庫 縦4.38m、横3.20mの長方形で、深さは1.95mである。壁下の底面に径4～10cmの円形のピットが30～110cmの間隔で確認された。ピット間には、径4～10cmの木材が横に据えられた状態で出土している。

通路 通路は、本跡の北東部の入り口から西に下り勾配で向かい、砲台部と弾薬庫につながっている。ロームを掘ってつくられた半地下式であり、上幅0.74～1.72m、下幅0.62～1.20m、深さは0.40～1.45mである。両壁に沿って、径8～16cmの円形のピットが、1.12～1.26mの間隔で確認された。底面には、砂と小礫が敷かれていた。

遺物 鉄製部品122点、合金製部品8点、鉄鍍1点、布切れ、アルミを貼り付けた布が出土している。高角砲を砲床に固定するための部品と考えられる1のボルトと2のナット、3の止金は、砲床の溝中に埋め込まれた角材に通された状態で出土している。5の鉄鍍は弾薬庫の底面から出土している。4の導線カバーは砲台部の覆土中から出土している。

所見 本跡は、掩体内に高角砲の砲床が残っており、本跡の西側40mに位置する防空指揮所跡と第6号溝で結ばれていることから、高角砲台跡と考えられる。



第37図 第5号軍事施設跡出土遺物実測図

第5号軍事施設跡出土遺物観察表

図版番号	種別	計測値				材質	出土地点	備考	
		長さ(cm)	幅(cm)	孔径(cm)	重量(g)				
第37図1	ボルト	49.5	2.2	—	(1,490)	鉄	高角砲砲床溝中	M9	P.L13
2	ナット	2.3	4.2	2.0	(120)	鉄	高角砲砲床溝中	M10	P.L13
3	止金	10.5	10.0	3.0	(210)	鉄	高角砲砲床溝中	M11	P.L13
4	導線カバー	(29.5)	1.2	0.8	(19)	ビニール	砲台部覆土中	Y1	P.L13

図版番号	種別	計測値				材質	出土地点	備考	
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
5	瓶	23.5	11.1	0.7	(1,410)	鉄	弾薬庫底面	M12	P.L13

5 遺構外出土遺物

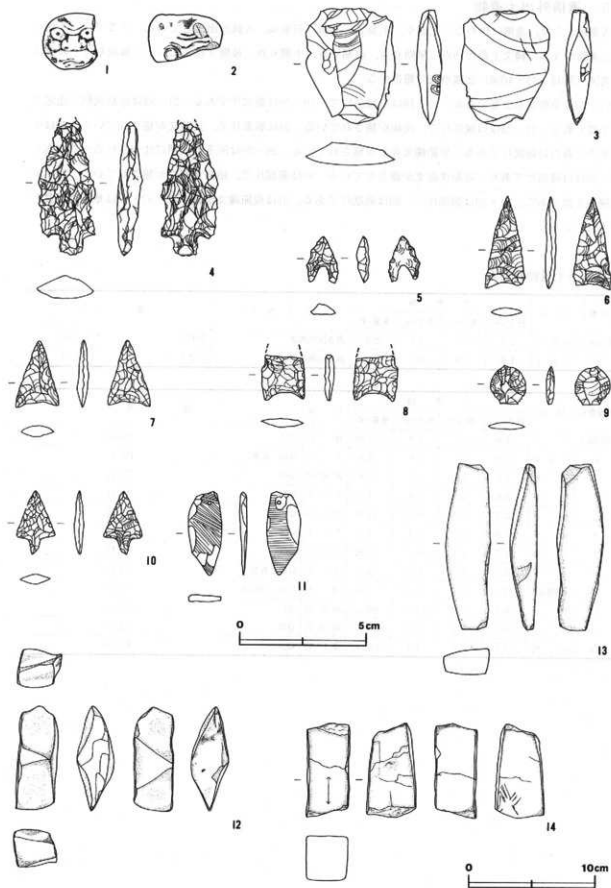
当遺跡からは、遺構に伴わない土器や、土製品、石器、石製品、古銭が出土している。ここでは、それらの出土遺物のうち、縄文土器片19点（早期6点、前期4点、中期6点、後期3点）について解説し、その他は、実測図（第38・39・40図）と観察表で報告する。

15～20は糸痕文系土器である。15～18は口縁部片で、19・20は胴部片である。21～24は浮島式期に比定される土器である。21～23は口縁部片で、沈線が施されている。24は胴部片で、貝殻文が施されている。25は中期前葉の土器の口縁部片である。単節縄文R Lが施されている。26～30は阿玉台式期に比定される土器である。26～29は口縁部片であり、結節沈線文が施されている。30は胴部片で、結節沈線文が施されている。31～33は後期の七器である。31・32は胴部片で、33は底部片である。31は複節縄文が施され、32・33は単節縄文R Lが施されている。

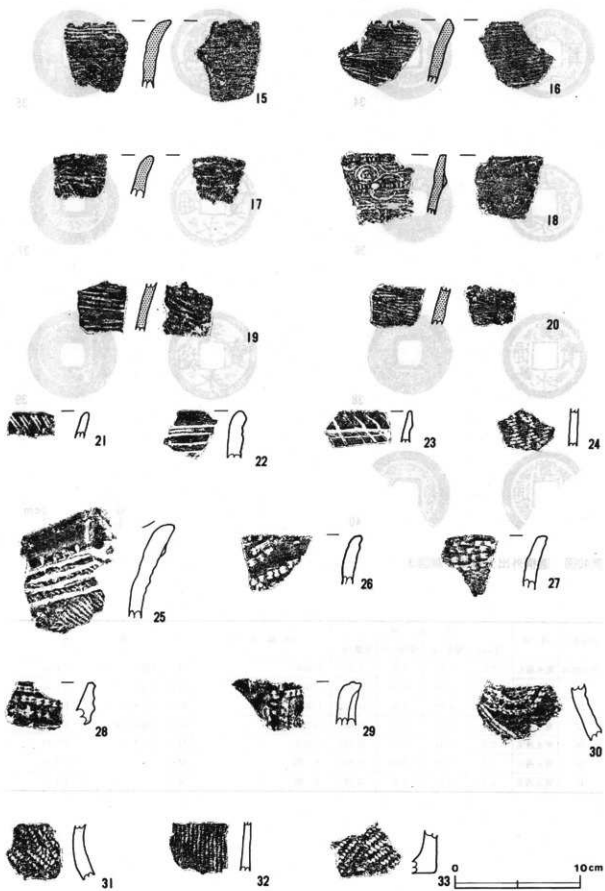
遺構外出土遺物観察表

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第38図1	泥面子	2.3	(2.2)	0.6	(2.9)	調査区南西部	PL16
2	泥面子	(1.9)	2.9	0.7	(3.3)	調査区南西部	PL16

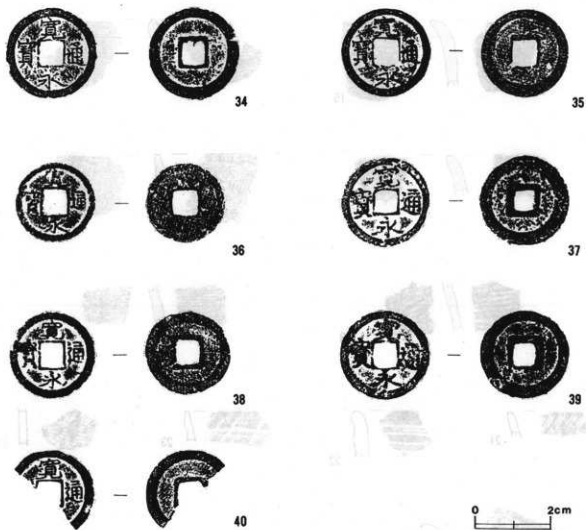
図版番号	種別	計測値				石質	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第38図3	刮片	4.8	3.6	1.0	(16.0)	頁岩	Q15
4	尖頭器	(5.3)	2.3	0.9	(9.8)	チャート	Q16 有蓋
5	石鏃	1.8	1.2	0.5	(0.6)	凝灰岩	Q17
6	石鏃	3.6	1.5	0.4	(1.9)	チャート	Q18
7	石鏃	2.7	1.7	0.5	(1.3)	チャート	Q19
8	石鏃	(1.8)	1.7	0.4	(1.2)	チャート	Q20
9	石鏃	1.5	1.45	0.3	(0.8)	チャート	Q21
10	石鏃	(2.5)	1.5	0.4	(1.0)	チャート	Q22 有蓋
11	石製穂虫品	3.3	1.3	0.3	(1.8)	滑石	Q23 剣形品
12	砥石	(8.3)	(3.3)	(2.5)	(85.0)	凝灰岩	Q14
13	砥石	(13.1)	3.7	2.1	(131.0)	凝灰岩	Q24
14	砥石	(7.5)	3.4	3.4	(157.0)	凝灰岩	Q25



第38图 遺構外出土遺物実測図(1)



第39图 遺構外出土遺物実測図(2)



第40図 遺構外出土遺物実測図(3)

図版番号	銭 銘	計 測 値				初 鑄 年 代	備 考	
		径 (cm)	厚さ (cm)	穿径 (cm)	重量 (g)			
第40図34	寛永通宝	2.5	0.10	0.65	(2.52)	1736年	M1	伏見手 P L 16
35	寛永通宝	2.4	0.06	0.70	(1.60)	1736年	M2	伏見手 P L 16
36	寛永通宝	2.1	0.09	0.65	(1.70)	1736年	M3	含二水永 P L 16
37	寛永通宝	2.4	0.13	0.55	(3.68)	1737年	M4	小梅手広摩 P L 16
38	寛永通宝	2.3	0.11	0.65	(2.34)	1738年	M5	秋田大字 P L 16
39	寛永通宝	2.4	0.12	0.60	(3.46)	不明	M6	P L 16
40	寛永通宝	2.3	0.09	0.60	(1.28)	不明	M7	P L 16

第4節 まとめ

当遺跡から、古墳時代中期の住居跡6軒と近代の軍事施設跡5基などが確認された。ここでは、古墳時代の集落の特徴及び軍事施設跡の性格について整理する。

1 古墳時代の集落について

(1) 住居跡出土の土師器の特徴と時期

坏 相対的に出土量が少ない。底部は上げ底と丸底がある。口縁部は外傾するものと、わずかに外反するものがある。体部外面はヘラ削りが施されている。

高坏 相対的に出土量が多い。脚部は中空で膨らむものと、ハの字状に開くものがある。坏部は下位に襷を持ち、外傾して立ち上がるものと、わずかに外反して立ち上がるものがある。坏部外面にヘラ削りが施されているものがあり、脚部外面は縦位のヘラ削りとヘラ磨きが施されているものがある。

甗 体部は横に張り出している。口縁部は内彎気味に外傾して立ち上がる。口縁部中に弱い襷を持つものがある。口縁部はヘラナデあるいは横ナデが施され、体部外面は横位のヘラ削りが施されている。

壺 相対的に出土量が少ない。頸部は直立するものがある。口縁部は折り返し、あるいは外反するものが多い。口縁部内・外面は横ナデが施され、頸部に指頭による押圧が施されているものがある。体部外面はヘラ削りが施されている。

甕 底部は下方に突出するものが多い。他に横に突出するものと丸底のものがあるが数は少ない。体部は、やや縦長の球形状のものが多く見られる。口縁部は、外反するものと、直立し上位で外反するものがある。体部外面はヘラ削りが施されている。ハケ目調整されたものが1点伴出している。

当遺跡の住居跡から出土した土師器は、その器形と整形の特徴から、古墳時代中期の土師器をⅠ期からⅣ期に分類した櫻村宣行氏の編年¹⁾のⅡ期（5世紀第2四半期頃）に相当するものと考えられる。

(2) 古墳時代の住居跡について

土器の様相から住居跡間に新旧がやや見られるが、当遺跡では、古墳時代中期の土器分類の一時期程度の同、低地に面した平坦な台地上に集落が形成され、その後は、人の生活痕は見られなくなる。

第2号住居跡では滑石製白玉4点が出土し、第6号住居跡では剣形品1点と滑石製白玉6点、ガラス玉3点が出土している。住居跡から石製横造品が出土し、出土土器の組成が似ていることなど、当遺跡の集落と実穀寺子遺跡の集落は共通性がある。

2 軍事施設跡について

(1) 阿見地区の海軍基地の防空

阿見町の霞ヶ浦西岸に面した平坦な台地上と霞ヶ浦湖岸は、第一海軍航空廠、土浦海軍航空隊、霞ヶ浦海軍航空隊など海軍の航空基地と海軍軍需部霞ヶ浦支部、海軍経理部支部、海軍気象学校、飛行艇格納庫、中島飛行機製作所阿見出張所等の軍事関連施設が置かれ²⁾、海軍の重要な軍事拠点であった。

阿見地区の海軍基地は、陸軍の第12方面軍高射第一師団の防空担当地域内にあるが、海軍航空基地の防衛要領によると、陸軍の作戦準備及び作戦に協力しながら所在海軍警備部隊をもって防衛する第3種基地であった³⁾。海軍は独自に、B29爆撃機やP51艦載機の空襲から軍事施設群を守る必要があったわけである。そのた

めに設置した施設のひとつが当遺跡で確認された防空砲台跡である。防衛庁所蔵の米軍引渡資料⁽⁴⁾⁽⁵⁾によれば、防空砲台は当遺跡の防空砲台の他に2か所設置されていた。主に、宍ヶ浦海軍航空隊基地の防空を担当した、土浦市の烏山の北砲台跡と土浦海軍航空隊基地の防空を担当した、阿見町青宿の青宿高地砲台跡の2か所である⁽⁴⁾⁽⁵⁾。なお、名称については、陸軍が使っていた高射砲を海軍は高角砲と、高射砲陣地を防空砲台と呼んだ。

(2) 防空砲台跡について

調査された防空砲台跡は、烏山の北砲台とともに宍ヶ浦海軍航空隊基地の防空を担当した南砲台跡である。防空施設跡は、防空指揮所跡1基、電波探信儀施設跡1基、高角砲台跡2基、不明施設跡1基の計5基である。防空施設跡の配置をみると、電波探信儀施設跡と高角砲台跡が防空指揮所跡を囲んでいる。

米軍引渡資料によれば、南砲台に設置されていた兵器の概要⁽⁴⁾は以下のとおりである。

四十五口径十年式12糎高角砲	4基
高射装置	1基
測距儀	1基
電波探信儀	1基

当遺跡の調査区域外には、後述するように高角砲台跡と思われる遺構が2基確認されており、その他測距儀、電波探信儀などを含め、米軍引渡資料の内容と今回の調査結果はよく一致している。

なお、聞き取り調査によると、南砲台は航空隊の三宅部隊長が陣いる天神山三宅部隊が担当し、当遺跡南東に兵舎が置かれていたということである⁽⁶⁾。

(3) 高角砲台跡（第1・5号軍事施設跡）

2基調査したほかに、高角砲台跡は、調査区域外にさらに2基存在している。1基は当遺跡南東側に隣接する雑木林の中にあり、視認できる。もう1基は当遺跡北東側の畑地内に、地図上で残体の一部と思われる高まりが認められるだけである。

調査された2基の高角砲台跡は、規模と内部構造が同じである。高角砲台は主に砲台部と弾薬庫からつくりされており、砂と小礫が敷かれた半地下式の通路でつながれている。

調査した2基のいずれの遺構からも高角砲は検出されず、砲床の中央部にはコンクリートが爆破されたような跡が残っている。聞き取り調査によれば、戦後、砲床を火薬で爆破して高角砲を取り去ったということである⁽⁶⁾。砲床には、溝が放射状に作られており、高角砲は、溝に緩衝材として埋め込まれたと思われる木材にボルトで固定されていたと考えられる。

弾薬庫と通路の上層構造は不明である。砲弾は出土せず、高角砲の部品の出土も少ない。聞き取り調査によると、戦後、兵舎で使用した井戸に砲弾と金属破片等を投げ捨てたということである⁽⁶⁾。

(4) 防空指揮所跡（第2号軍事施設跡）

砲弾発射までには、聴音機、探照灯、電波探信儀等による敵機の捕捉、敵機の位置を計算して予測する測高、発射という順序がある。防空指揮所は、高角砲台への敵機の位置の連絡等の役割をもった施設であり、この施設の中で、高角砲隊の観測班が、弾の炸裂する位置（敵機の未来位置）を求めるための三元（高度、航速、航路角）⁽⁷⁾を測定し、高角砲台に指令を送っていたと考えられる。当時の軍の部隊間の連絡方法から、防空指揮所と各軍事施設間は埋設ケーブルで連絡をとり、大隊とは無線で連絡をとっていたと考えられる⁽⁸⁾。

2基確認されたコンクリート製の台座は同じ規模である。米軍引渡資料によると測距儀が1基設置されていた¹⁴⁾。測距儀は東コーナー部の溝のある台座に設置されていたと考えられる。

(5) 電波探信儀（レーダー）施設跡（第3号軍事施設跡）

米軍引渡資料によると、南砲台には電波探信儀が1基設置されていた¹⁴⁾。電波探信儀は本跡の中央部に構築されている頑丈なコンクリート製の台座の上に固定されていたと考えられる。

本跡では、発電機が設置されていたと思われる内部施設跡が確認された。聞き取り調査によると、基地の外側から、艦船に設置されているようなレーダーが回転する様子が見られ、回転が始まるとB29爆撃機が上空に飛来した¹⁶⁾ということである。

(6) 不明施設跡（第4号軍事施設跡）

他の軍事施設跡と比較して規模が小さく、金属部品等の遺物は出土していない。本跡の性格は不明であるが、鳥根郡妻川町の平野遺跡の海軍の防空砲台跡では哨臺（一人用の塹壕）跡が1基確認され¹⁹⁾、三鷹市の羽根沢台遺跡Ⅱの高射砲陣地跡内では半地下式の避難塹壕跡が確認される¹⁰⁾など、陣地跡内で避難塹壕跡が確認されていることからすれば、避難塹壕跡の可能性が考えられる。

(7) 阿見地区の他の防空砲台との比較

南砲台とともに霞ヶ浦海軍航空隊基地の防空を担当した北砲台、土浦海軍航空隊基地の防空を担当した青宿高地砲台に設置されていた兵器の概要¹⁴⁾¹⁵⁾は、米軍引渡資料によれば以下のとおりである。

北砲台

八九式12.7糎高角砲	4基
高射装置	1基
測距儀	1基
15糎探照灯	2基

青宿高地砲台

四十口径三年式8糎高角砲	2基
五年式二米半測距儀	1基

南砲台と北砲台は同規模であり、青宿高地砲台はやや小規模であった¹⁵⁾と考えられる。

南砲台の4基の高角砲は12糎砲のC型と呼ばれる陸上用砲台と思われ、砲の俯仰、旋回が人力で行われていた。北砲台の4基の高角砲は、当時世界的に性能が優秀であったと言われている12.7糎砲で、砲の俯仰、旋回は電動で行われていた¹⁸⁾。

南砲台は、昭和17年から艦船に設置され、当時としては最新兵器であった¹⁷⁾電波探信儀で、北砲台は探照灯で敵機の捕捉をした。青宿高地砲台については不明である。

以上のことから、霞ヶ浦海軍航空隊基地の防空を担当した南砲台と北砲台は、規模は同じであるが、それぞれ、異なる兵器により防空にあたったことなどが分かった。

註

- (1) 櫻村宣行「和泉式土器編年考—茨城県を中心として—」『研究ノート』5号 茨城県教育財団 1996年
- (2) 内山純子「海軍航空隊と阿見地域」『阿見町史研究』第2号 1981年
- (3) 防衛庁戦史室「関東の防衛」『本土防空作戦』朝雲新聞社 1968年
- (4) 「霞ヶ浦航空基地引渡目録」1945年（防衛庁防衛研究所所蔵、米軍引渡資料）
- (5) 「土浦海軍航空隊引渡目録」1945年（防衛庁防衛研究所所蔵、米軍引渡資料）
- (6) 土浦市荒川本郷地区在住 浅野力松氏による。
- (7) 伊藤厚史氏の御教示による。
- (8) 森山 元『高射第一・三師団戦史資料（戦訓）』（防衛庁防衛研究所所蔵資料）
- (9) 穴道年弘『平野遺跡群発掘調査報告書Ⅰ』鳥根県荒川町教育委員会 1983年
- (10) 浅見 潤『三鷹市埋蔵文化財調査報告第18集 羽根沢台遺跡Ⅱ』三鷹市教育委員会 1996年
※避難整備跡の可能性として報告されている。
- (11) 『砲兵兵器要目 4 高角砲』（防衛庁防衛研究所所蔵資料）

参考文献

- ・茨城県教育財団「荒川本郷地区特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書（Ⅰ）実教古墳群・実教寺子遺跡Ⅰ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第144集 1999年
- ・茨城県教育財団「荒川本郷地区特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書（Ⅱ）実教寺子遺跡Ⅱ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第151集 1999年
- ・阿見町史編さん委員会『阿見町史』1983年
- ・熊谷 直「開戦時の陸海軍航空部隊」『太平洋戦争 陸海軍航空隊』成美堂出版株式会社 1979年
- ・十妻敦武「戦争遺跡とは」「戦争遺跡は語る」かもがわ出版 1999年
- ・谷本清子『川崎市麻生区黒川地区遺跡群報告書Ⅵ』黒川地区遺跡調査団 1995年
- ・横須賀市吉井・池田地区埋蔵文化財発掘調査団『吉井・池田地区遺跡群Ⅱ』1997年
- ・伊藤厚史『豊橋市埋蔵文化財調査報告第35集 権現山』豊橋市教育委員会 1997年
- ・伊藤厚史「戦争遺跡調査の実践記」『考古学研究』第42巻 第4号 1996年
- ・伊藤厚史「朝日遺跡の乱杭遺茂木」『三河考古』第9号 1966年
- ・伊藤厚史「負の文化財—戦争遺跡の重要性—」『文化財学論集』1994年
- ・伊藤厚史『見晴台遺跡発掘調査報告書 近代編』名古屋市見晴台考古資料館 1992年
- ・伊藤厚史「愛知における戦争遺跡の調査」『日本考古学協会1998年度沖縄大会 資料集』日本考古学協会1998年度沖縄大会実行委員会 1998年
- ・文化財保存全国協議会『明日への文化財』38号 1996年
- ・菊池 実・金井安子「戦争遺跡関連文献目録と保存運動団体一覧」『明日への文化財』41号 文化財保存全国協議会 1998年
- ・菊池 実・金井安子「戦争遺跡関連文献目録補遺」『明日への文化財』42号 文化財保存全国協議会 1998年
- ・浅川利・「第二次大戦中の遺跡を発掘する—町田市・田中谷戸遺跡の場合—」『月刊考古学ジャーナル』6 1987年
- ・竹内 昭・佐山二郎『日本の大砲』共同社 1986年
- ・『日本兵器総集 昭和16—20年版 一月刊雑誌「丸」別冊—』潮書房 1977年

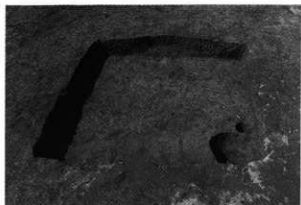
写 真 图 版



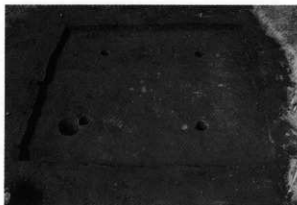
昭和22年米軍撮影空中写真（阿見町，土浦市の海軍基地群） 約 1/43,740 国土地理院所蔵



昭和22年米軍撮影空中写真（阿見町実穀地区） 国土地理院所蔵



第1号住居跡



第3号住居跡



第1号住居跡遺物出土状況



第3号住居跡遺物出土状況



第2号住居跡



第4号住居跡



第2号住居跡遺物出土状況



第4号住居跡遺物出土状況



第5号住居跡



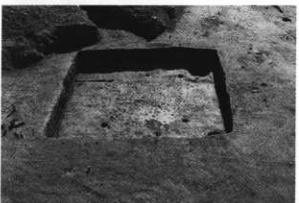
第1号軍事施設跡砲床



第5号住居跡遺物出土状況



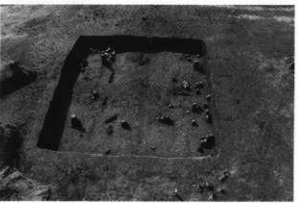
第1号軍事施設跡弾薬庫



第6号住居跡



第1号軍事施設跡砲床溝



第6号住居跡遺物出土状況



第1号軍事施設跡砲床溝



第2号軍事施設跡 (防空指揮所跡)



第2号軍事施設跡台座



第2号軍事施設跡指令室跡



第3号軍事施設跡 (電波探信儀施設跡)



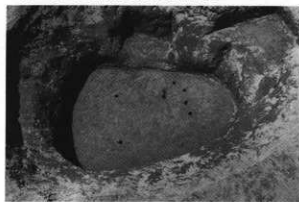
第2号軍事施設跡通風管



第3号軍事施設跡電波探信儀台座



第2号軍事施設跡台座



第4号軍事施設跡



第5号軍事施設跡遺溝確認状況



第4号溝



第5号軍事施設跡（高角砲台跡）



第6号溝



第5号軍事施設跡弾薬庫



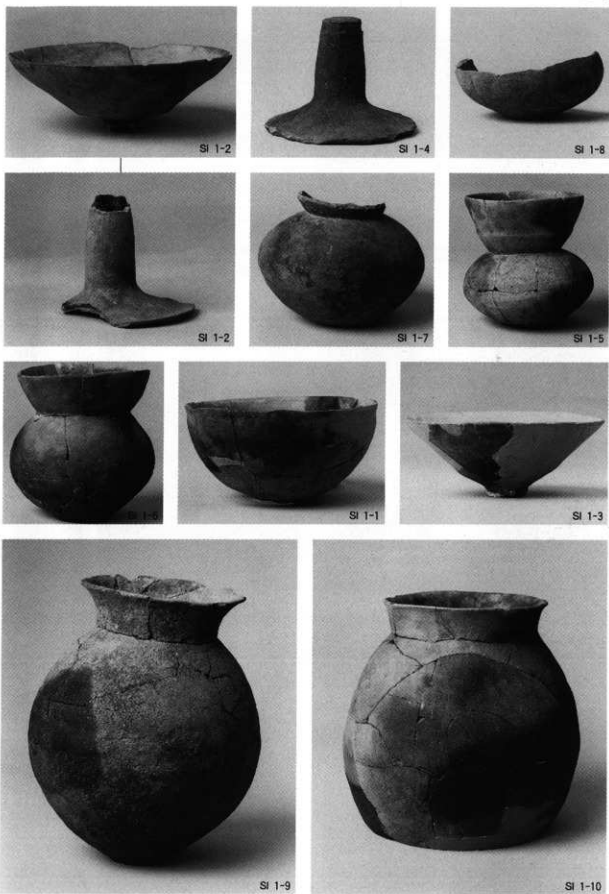
第1号井戸跡



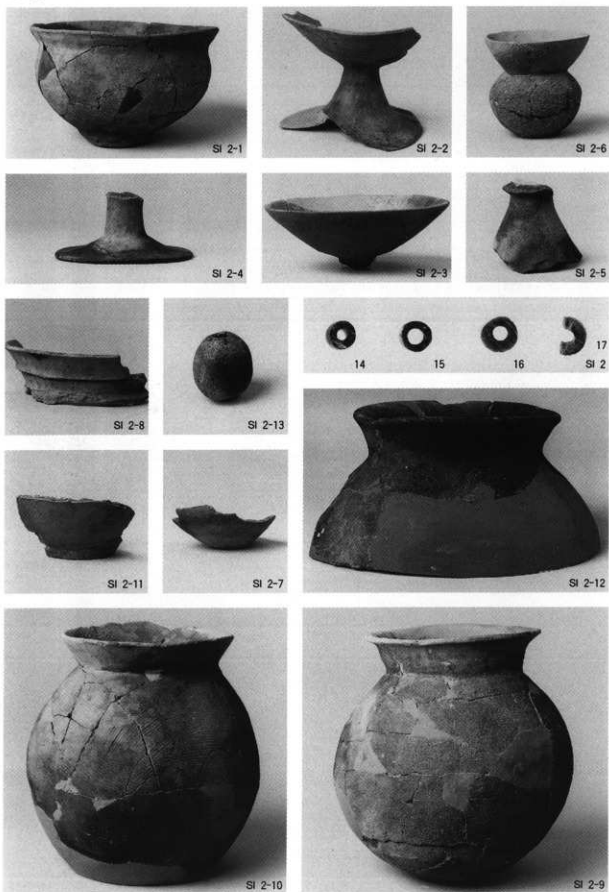
第5号軍事施設跡通路跡



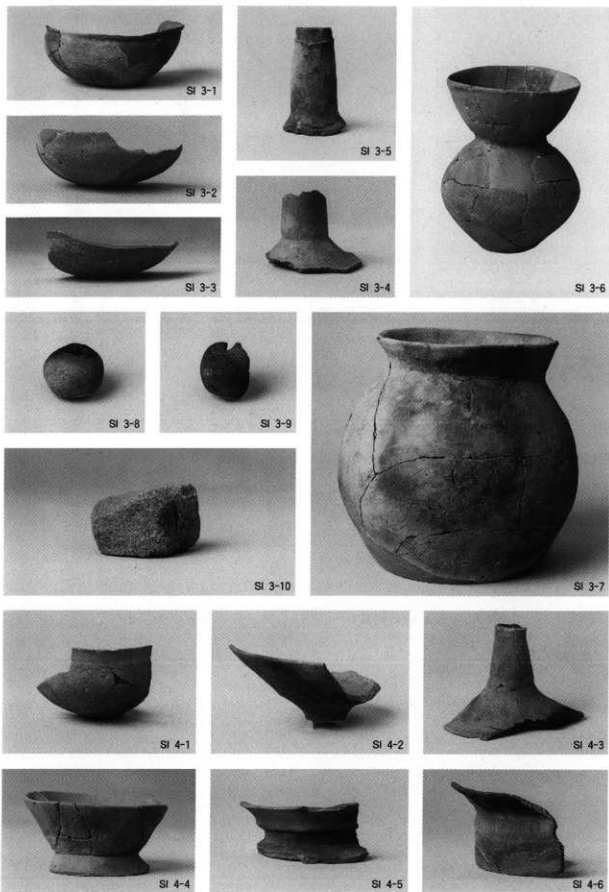
第35号土坑遺物出土状況



第1号住居跡出土遺物



第2号住居跡出土遺物



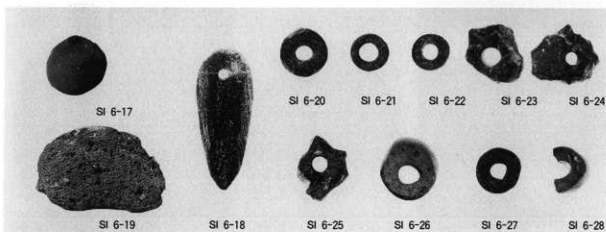
第3・4号住居跡出土遺物



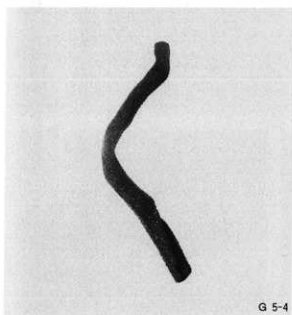
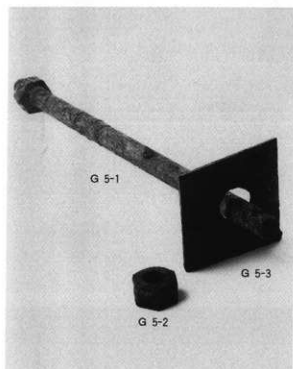
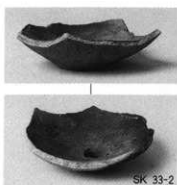
第5号住居跡出土遺物



第5・6号住居跡出土遺物



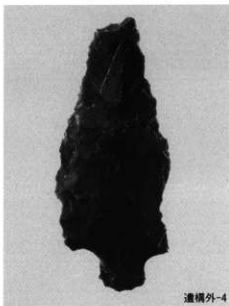
第6号住居跡出土遺物



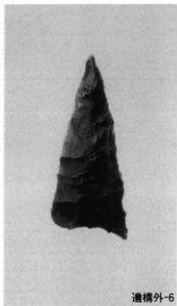
第33号土坑・第2号军事施設跡・第5号军事施設跡出土遺物



遺構外-3



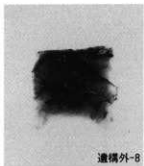
遺構外-4



遺構外-6



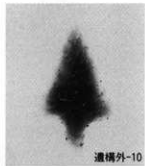
遺構外-5



遺構外-8



遺構外-9



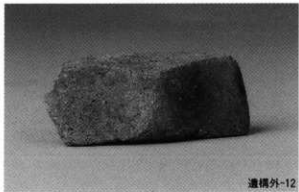
遺構外-10



遺構外-7



遺構外-11



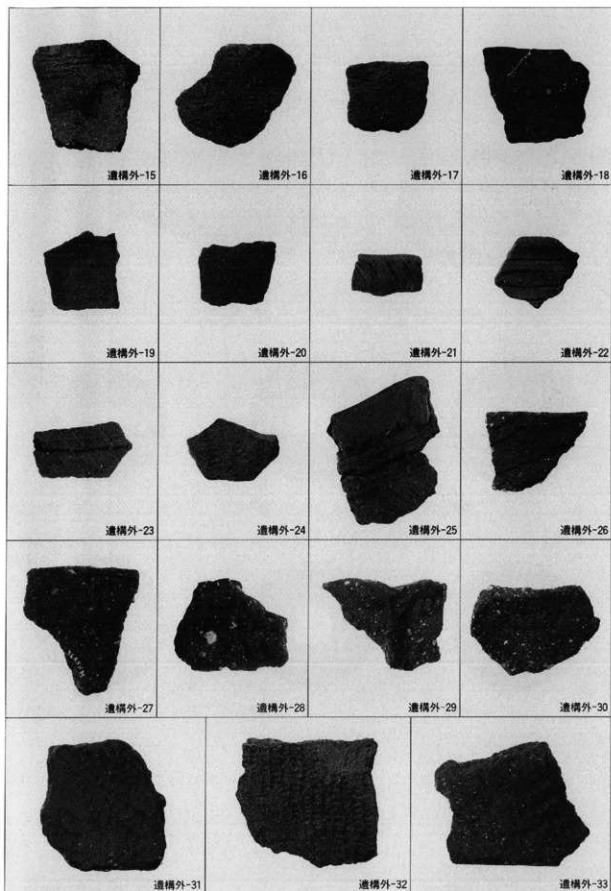
遺構外-12



遺構外-13



遺構外-14



遺構外出土遺物



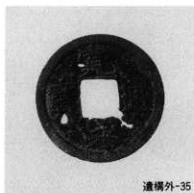
遺構外-1



遺構外-2



遺構外-34



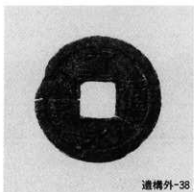
遺構外-35



遺構外-36



遺構外-37



遺構外-38



遺構外-39



遺構外-40

遺構外出土遺物

茨城県教育財団文化財調査報告第156集
(仮称)荒川本郷土地区画整理事業
地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ
実穀寺子西遺跡

平成12(2000)年3月16日印刷

平成12(2000)年3月21日発行

発行 財団法人 茨城県教育財団
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2
茨城県水戸生涯学習センター分館内
T E L 029-225-6587

印刷 株式会社高野高速印刷
〒310-0035 水戸市東原2-8-1
T E L 029-231-0989

付 図

茨城県教育財団文化財調査報告第156集

実穀寺子西遺跡



付図 突鞍寺子西遺跡遺構全体図

0 20m